

「三重貞亮著『舊事紀訓解』」に見える聖徳太子伝記

高 橋 庸 一 郎

はじめに

聖徳太子についてかかれた物は歴史的に見ると、法隆寺金堂の薬師仏像造記、同じく法隆寺金堂の釈迦仏像造記などのほか、伊予道後温泉聖徳太子行啓御碑、中宮寺天寿国曼荼羅繡帳記、元興寺露盤記などの金石文献に類するものから、元興寺伽藍縁起、四天王寺御朱印縁起などの寺社縁起類、また江戸時代に作られた多くの聖徳太子関連書まで含めるとその数は極めて夥しい。そうした多数の文献は大雑把に二つに分ける事ができる。その一つは寺社縁起や「聖徳法王帝説」やそれに続く歴史書などに多くみられる所謂聖徳太子の伝記である。今ひとつは、後人が聖徳太子の名を借りて、当時名の自分の意に染まない世情に対して未来を予言し、現世に警告を発するといった類のものである。後者については和田英松が「聖徳太子未来紀の研究」の中で、石の記文、夕郎故実所載本、天王寺蔵本、未然本記などと分類して取り上げ、細

かく数えれば恐らく二十数本になるであろう。

今ここに取り上げようと言うのはこうした所謂、未来記ではなく、上記前者の聖徳太子伝記に当たるものである。聖徳太子の伝記として最も時期的に早く、且つそれまでに書かれた聖徳太子伝記類の集大成とも言うべき物は「聖徳太子傳暦」（以下『傳暦』と略称）であるが、この書以前にかかれた聖徳太子の伝記としては次のようなものがある。

- 1、「上宮記」（逸文）
- 2、「上宮聖徳法王帝説」
- 3、「上宮太子菩薩傳」
- 4、「聖徳太子傳」（逸文「明一伝」）
- 5、「上宮聖徳太子傳補欠記」
- 6、「七代記」

（また、「伝暦」の跋文には、「日本書紀」のほかに「在四天王寺壁聖徳太子傳」「無名氏撰傳」「太子行事奇蹤書」などが挙げられている。）

以上掲げた以外に、「傳暦」以降に書かれた聖徳太子の伝記はあまり多くはないものと思われるが、そうした中でもかなり詳しいはつきりした聖徳太子の伝記でありながら、あまり取り上げられる事のなかった物に、「舊事紀」の類がある。これについて少し述べておく。

(二) 十巻本「舊事紀」について

現在知られている旧事紀には三種ある。その一つは所謂、十巻本「先代舊事紀」でこれは「国史大系」に収められている。この書は聖徳太子撰述とされているけれど、古来偽書とされ歴史を扱う場合には、この書が用いられる事は殆どない。しかし歴史上ではすでに延喜年間（九〇〇年代の初め）に「先代舊事本紀」に言及した文献も見え、また「本朝月令」（九〇〇年代前半）にもその名が見える。ただ享保年間に多田義俊が「舊事本紀」の序文が偽作であるという事を理由としてこの書の偽書説を唱えてから後、安永年間に伊勢貞丈が更に上記論証を強化し、遂にこの書は歴史書としては顧みられることがなくなってしまったのである。しかしその後、橘守部や御巫清直等が「舊事紀」はその序文と本文とは分けて考えるべきで、序文は後人が附加したもので、本文は全篇偽なるものは一つも存在しないと断じたが、既成の通説となつてしまった偽書説を覆す事は出来ないままに今日までいたつたようである。

「先代舊事本紀」は全十巻で第一巻神代本紀、陰陽本紀から始まって巻第十の国造本紀までである。巻第九に帝皇本紀があり、その敏達天皇紀、用明天皇紀、推古天皇紀などに、聖徳太子についての記述、天皇が聖徳太子に「以萬機悉委矣」と宣したという

事や、太子薨去に際しての人々の歎き悲しみを表した記述が若干見えるだけであり、これだけでは伝記とはいえない。

(三) 「舊事大成經」について

次に「舊事大成經」についてであるが、これは上州館林の広済寺の潮音の手になる偽書であるとされている。尤も潮音はこの書を、聖徳太子の御書として世に広めたとされ、全七十二巻のうち正部三十八巻に序伝二巻を合せて、合計四十巻として延宝七年に出版したらしい。しかし潮音はこの時に当たって更に「伊雑宮年中行事」、その他を撰し、これらの書の記述を根拠として、伊雑宮があたかも伊勢神宮の本宮であるかのように画策したため、延宝九年内外宮の禰宜らが連名で「舊事大成經」の版行停止を朝廷に申請し、そのことが認められて版行停止ばかりでなく、この書を所持するものは悉く破棄させられたのであった。また幕府もこのことを詮議し、伊雑宮の神主は流罪、潮音は為に十日の閉門三年の禁足に処せられたという。ただ閉門中に潮音は「舊事大成經」が一字一句といえども改竄によるものはないという、「大成經破文答釋」一篇を著し、禁足が解かれた後、潮音の依つた黒滝山不動寺は大いに発展し、二百の末寺を有するまでになったという。

「舊事大成經」は山崎闇斎のような碩学もその著書に引用し、潮音直後に世に出た人徧無為はその生涯をかけてこの書の注釈を行つたといわれ、それほど魅力ある書であつたらしいが、残念ながら今手近にそれを見ることは出来ない。

(四) 三十卷本「舊事紀」とその「訓解」

さて最後に「舊事紀訓解」についてであるが、この「訓解」の本文である「舊事紀」も実は偽書としての疑いの極めて濃厚な書である。これは本文「舊事紀」としてのみ世に出ているものではなく、三重貞亮著として、「訓解」が附加された「舊事紀訓解」が世にあるだけである。

三重松庵貞亮は延宝二年に生まれ、享保十九年に没し、享年六十一歳。京都の人で、陽明学を唱導し、元禄十五年に「王學名義」二巻を著している。特別な師は持たずに、「傳習録」を独学で学んで陽明学に入ったという。その主張は、「万人同等、君臣と雖ども、本と差等なし」であった。その松庵が神道の卓越性に惹かれ傾倒していくようになった経過については、「訓解」巻八十二、神教経四、靈宗第五に、

愚、年十七ニシテ、先考謙讓先生ノ命ヲ受テ、儒佛ノ書ヲ研究シテ、儒佛ノ緊要ハ、本心ニ在コトヲ知ル、然ドモ、其端的ヲ見ルコトアタハズ、於_レ是、永源寺全應禪師ノ垂示ニ因_リテ、趙川無佛性ノ話則ニ參ズ、然ドモ、秋毫ノ補アルコトナシ、後ニ、象山集要ヲ熟讀シ、揚慈湖ノ爲ニ、孟子ノ四端ノ心ヲ舉テ、本心トスルヲ看テ、恍然トシテ、其端的ヲ見ルガゴトシ、四十二歳ノ時ニ至テ、神書ヲ研究シ、神籬、磐境、息境ノ祕傳ヲ得テ、本心ノ端的ヲ見タリ、是ヨリ、此書ヲ解スルコト、破竹ノ勢アリ、此愚ガ見識ノ勝レタルニ非ズ、皇天ノ神助ニヨルモノナリ、大歡ノ甚キ、手ノ舞足ノ蹈コトヲ知ラズ

と有り、また同じく、「訓解」巻七十六、神文天、神文伝に、

貞亮十七歳ノ時ヨリ、先考謙讓先生ノ命ヲ受テ、神儒佛ノ書ヲ學ブ、初ヨリ、國音ニ、必ズ其意アルベキコトオモヒ、又神道ハ、本國ノ教法ナレバ、儒佛ノ書ヨリモ、先其奥義ヲ研究スベキコトナリトオモヘリ、然ドモ明師ニ逢コトモ得ザレバ、奈何トモスルコトアタハズ、但儒佛諸子百家ノ書ノミヲ研究涉獵シタリ、二十五歳ノ夏、北野宮ノ廟祝隨恩トイフ者ヲ紹介トシテ、勘解由小路大納言韶光卿ニ拜謁ス、彼卿ノ恩惠、日々ニ渥クシテ、家藏ノ書ヲ徧ク讀コトヲ許シ玉フ、由_レ是、二十一史ヲ始メ、故事小説詩文ノ集マデ看ルコトヲ得タリ、爾後、韶光卿ノ命ニ從ヒツ、仁齋先生ノ門人ニ列リ、北村可昌、田中親長ノ類ト、毎々講習討論シテ、唯儒學ヲノミ宗トシテ、却テ神道ヲ蔑スルニ至リ、本邦ヲ夷ナリトオモヒトリ、國音ノ義ナドヲ究ルコトハ、オモヒカケズ、三十二歳ノ春、同門生豐滿教元ニ誘レテ、江州八幡山ニ到リ、教授ノ師ヲ僭シテ、儒醫ノ書ヲ講ズルコト、年所多カリキ、四十三歳ノ時ニ、淺利甲斐守太賢ガ高弟、中島證之進トイフ者、幡山ニ來寓シテ、余ニ從テ儒書ヲ學ブ、余、乃チ證之進ヲシテ、六根清淨、太祓ヲ講ゼシム、爾時ニ、余問テイハク、天ハ、何ノ義アリテ、あめト名ヅクル耶、證之進、答テ、曰、天ヲ、あめト名ヅクルコトハ、是あまるヲ下略シ、式々初四相通シテイフ、天ノ體用廣大無邊ニシテ、心思ヲ以テ測量スルニ及バヌ故ニ、天ヲ、あまるト名ヅケタリ、余、又問テ曰、其測量スルニ及ヌモノヲ、何ノ義アリテ、あまるトイフ耶、證之進、答ルコトアタハズ、於_レ是乎、其聲母アルベキコトヲ覺知ス、然ドモ、其義ヲ曉得スルコトアタハズ、思ヲ覃クシ、精ヲ研キ、寤寐ニ忘ル、コトナク、千辛萬苦ス、一日、神文ヲ得テ、日々ニ熟讀玩索シ、國音ニ於テ、其義ヲ曉ベカラザルモノ、三十三音アルヲ擇ビテ、支那ノ文字ヲ

以テ對譯スルニ、其義、明ナルコトヲ得タリ、然レドモ、其所ニ以
然ノ理ニ至テハ、イマダ分曉ナルコトヲ得ザリキ、一旦、醫工
ノ病人ヲ療ズルニ、五運六氣ノ理ヲ以テ、補瀉溫涼ノ劑ヲ用ル
ニ、其效驗審實ニシテ、空論妄談ニ非コトヲ思ヒテ、忽然トシ
テ、一切萬物、悉皆五行ニ至リテ極矣、地水火風空ノ五大ヲ以
テ、^{キヤカラバ}一切ノ法門トシ、大日如來、自性法身トスルコト、極
成ノ道理ナルコトヲ見得シテ、三内五處ノ五行配當ノ義ヲ以テ解
釋スルニ、明ニ、其所ニ以然ノ理ヲ得タリ、於レ是乎、心中ニ、
天照大神ヲ念ジタテマツリ、太神宮神璽ノ前ニ於テ、神文ヲ一字
ヅ、逐テ、漢文ヲ以テ解釋スルニ、難ナク、四十七音ヲ悉皆釋シ
竟ル、命ジテ聲母傳トイフ、自レ是以後、聲母子語ノ義例ヲ以テ、
國音ヲ解釋スルニ、片言隻音、正語助辭、一モ遺スコトナク、其
義ヲ得ザルモノアルコトナシ、向來、聲母アルベキコトヲ思ヒシ
ニ、明ニ曉得スルコト、豈ニ貞亮ガ短慮ニ出モノナランヤ、偏
ニ、天照大神ノ神助ナルコト決シテ疑フベキニ非ズ、誠ニアリガ
タキコトニテ、感涙肝ニ銘ジタリ、今餘年五十八、神文傳ノ訓辭
ヲ著スニ至リテ、聲母傳ヲ國語ニヤハラゲテ、神文ヲ解釋スルコト
如レ左、然ニ、世ノ神書ヲ講ズルモノハ、聲母子語ノ義ヲ不知、
其難解ノ國音ニ至リテハ、自語トイフ遁辭ヲナス、嗚呼、其自語
ト云フ義イカナル所以ヲシラズ、或ハ、和漢相濫シテ解スル者ア
リ、捧腹ニタエズ、學者、マサニ、聲母子語ノ例ヲヨクヨク理會
スベシ

とあつてその経緯がほぼわかる。しかし最も肝心な点、即ちこ
の三十巻本の「舊事紀」を、何時、如何なる経緯で入手し得たの
かについては、松庵の記述では殆ど明らかにされていない。それ
がこの書が偽書とされる最も大きな根拠の一つとなっているので

あろうが、こればかりは反論の余地がない。

以上縷縷書き連ねてきた事は、明世堂が昭和十九年一月に編者
財団法人明治聖徳記念学会として出版した三重貞亮著「舊事紀訓
解 上下」巻頭の当学会の手になる解題に多くを依っている。し
かしこの解題でもこの点を、「松庵は更に白川家に入門し、伯家
の秘傳類を重要視する事を縷縷述べてをるが、それを本書には殆
ど引用してをらず、三十巻舊事紀に關しても序文に「白河ノ神祇
ノ伯家二先代舊事本紀三十卷アリ云々」とあるのみで、白川家の
何人よりその書を得たといふことは明記してをらないし、曾根研
三氏著伯家記録考にも松庵の名は見えず、揣摩憶測すれば、伯家
との關係もあまり深くないといえよう。」と述べている。松庵は
先の引用からも解るように、儒学、仏学は多くの書或いは多くの
師に学んだことが解るのであるが、神道の学は四十二歳からはじ
めて、浅利太賢やその高弟中島證之進などにも些かの影響は受け
たであろうが、神書そのものを学ぶより「神文」を得て、「聲母
傳」を体得する事により「神文傳」の訓解を著して、その本質を
会得したというのであるから、神道の学を松庵はほぼ独学で終始
しているのである。そして遂には儒仏超えた神道の卓絶性に目覚
めたのである。しかし「神文傳」といい、「聲母子諸ノ義」とい
うも、それらと神道の關係についてはあまりはつきりとは見えて
こない嫌いがある。

いずれにせよ三十巻本「舊事紀」がどういう経過で松庵の目に
とまり、この書の成立や、伝世の経緯等を含め、どのような部分
に松庵は魅力を感じて、このような驚くべき博引傍証にうらづけ
られた膨大な注釈書を物にするに到ったかは、依然として闇の中
である。

(五) 「舊事紀訓解」の内容

この書は三十卷「舊事紀」、即ち神代から推古朝にいたるまでの古代史、聖徳太子の伝記、および神宣、祝詞、十七条憲法などを記録した書に注釈を加えつつ、松庵の独自の神道学についての考えを述べたものである。

第一卷神代本紀 第二卷陰陽本紀 第三卷神祇本紀 第四卷天神本紀 第五卷地祇本紀 第六卷天孫本紀 第七卷皇孫本紀 第八卷から第十九卷までは天皇本紀【第一（神武紀）第二（綏靖紀―開化紀）第三（崇神紀―垂仁紀）第四（景行紀―神功紀）第五（応神紀―仁徳紀）第六（履中紀―安康）第七（雄略の半ば）】であるが、以上は第十四巻までであり、第十五巻以下第十九巻まで五巻は原文・訓解とにもない。】 第二十巻皇太子本紀上（聖徳太子誕生時から二十五歳まで） 第二十一巻皇太子本紀下（聖徳太子二十六歳から薨去まで） 第二十二巻經典本紀（中臣祓、神文伝、神教経、宗徳経、憲法） 第二十三巻祭祀本紀 第二十四巻禮樂本紀上 第二十五巻禮樂本紀下 第二十六巻（律曆本紀） 第二十七巻（太古本紀） 第二十八巻（職官本紀上） 第二十九巻（職官本紀下）【第二十三巻から第二十九巻までの七巻は目録は存在しているものの、いずれも「亡」と成っていて、原文、訓解ともにない。】 第三十巻（国造本紀）【この巻には「亡」の記載はないが、原文、訓解ともに存在しない。】

ここで問題にしたいのは、第二十巻、第二十一巻の聖徳太子の伝記の部分であるが、聖徳記念学会の序文に依れば「皇太子本紀は大成経の聖皇本紀に類似するものであって、秦河勝の撰であろう

と松庵は言つてをり、大成経には河勝の序文がある。」とのことであり、また「神文傳・神教経・宗徳経の類は歴史的觀點よりすれば一顧の価値もない。」とし、また「憲法は大成経の憲法本紀に相当するものであるが、所謂五憲法ではなく、大成経の通蒙憲法（日本書記の十七条憲法と大同小異）に相当する一種のみである。」とし、更に「本書は大成経に頗る似た所のあるものであるが、現存する七十二巻本の大成経と比較するに、その間字句の異なるものが相当に多く、松庵は大成経の文辭を拙劣と酷評してゐる。」しかし結局は「松庵の所謂三十巻舊事紀は大成経の異本と評するのが穩当かもしれない。」と結論付けている。ただ「大成経」で非とされた崇峻天皇までのおくりなが推古天皇の時代に奉られたと言う点は、「日本紀私記」によつて提示され、本居宣長の詳論で正しいとされてきた、淡海三船が奉つたと言う説がそのまま取られていたりしているが、「大成経」につけられていた聖徳太子の手になるという「未然本記」はここでは付けられては居らず、幾つかの点では「大成経」より幾分かは改変された内容になっている。

しかしこれらはこの書が偽書ではないと言う証にはならないばかりでなく、寧ろこの書が松庵自身の手になる偽書ではないかと言う濃厚な疑いを抱かせる点にもなっている。

(七) 三十巻本「舊事紀」の聖徳太子伝の特徴

この三十巻本「舊事紀」は総じていうなら、平安朝初期に不詳の人、平氏によつて撰せられた「聖徳太子傳曆」に極めて似かよっていると言える。

例えば最初の太子誕生に到るまでの記述の中で、後の太子の母

となる間人穴太部皇女の前に金色の僧が現れてその口に入ると言う話も、「舊事紀」では僧ではなく神人で、また「傳暦」ではこの僧は救世菩薩と成っているが、「舊事紀」では救世を願う者であつて、菩薩とは言っていないなど細かなところではそれぞれ微妙な違いはあるものの全体としては同じである。例えばこの後、皇子、妃、太子が後ろの園に遊んだ時の事、太子が諸少王子達と口闘した事、蝦夷冠境の事、土師連八島と熒惑星との事、太子一度に三十六人の子供の話を聞き分けた事、日羅の事、片岡山の飢人の事、細かい点はともかく、話の全体の流れは殆ど変わっていない。

しかしそうした「傳暦」と同じ流れの上に付け加わっている話も実は細かく見ると多いのである。例えば敏達元年に、世の人々の言葉として、「此皇子興神道」とか「此皇子當興儒教」、また敏達二年には、「此皇子當弘佛法」と見えて、後に太子が「夫神道者根本也、儒佛者枝葉也、佛法者花実也」というのに符合させている。つまりこの「舊事紀」では太子は神儒佛の体現者であつて、その中でも神道は最も中心のものであると認識しているものとしてるのである。そしてこうした考えが松庵自身の考え方でもあると言う点が、この書が松庵自ら著作した偽書ではないかと言う疑惑にも繋がっているのである。此れは一例に過ぎないが、この書では太子が随所に渡つて神道や儒教について縷縷解説を施す場面が用意されている。

またこうした神儒佛についての解説とは別に「傳暦」に全く見られない記事もここには多く含まれている。例えば用明天皇元年の条には、「太子奏曰。秦字与國語。異音同義：世鮮知之者」として「太子。擇秦字一万三千字。以國音附其傍。名之曰點」とあ

つて太子が漢字の音と意味を確定したと言う事になっている。また推古天皇六年の条には聖徳太子の発案で二月八日を特に定めて、野山に入り薬草を掘る日と決め、また朝廷に薬部を設けて年老い力衰えたる者は自分の掘った薬草を薬部に売つて何がしかの生活の糧を得ることができるようにしたとある。また同七年には天皇が帝城東門に悲田院を設け、諸国に悲養部を置いたと有り、この時太子が周文王の像を作つて悲田院に置いたとある。

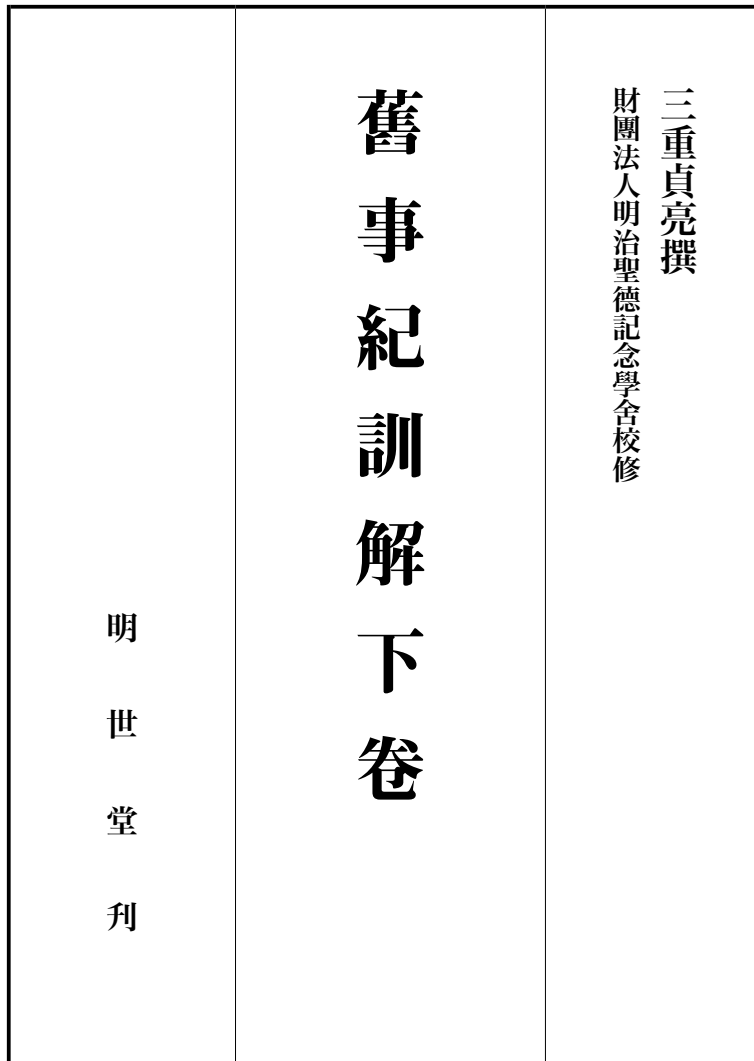
また施薬院のことも同様に十年の条に見える。更に十八年の条には高麗の高僧曇徴に太子が命じて四種の大和紙を作らせたとあつて、其四種とは、雲紙、縮紙、白紙、俗紙であるとし、其用途、材料なども記してある。

(八) 聖徳太子伝の再録

この書を仔細に検討してみると、以上のような情況はまだまだ数多く指摘する事ができる。こうした説話や逸話は、この書を誰が作つたにせよ、松庵を含めて作成当時の伝承として巷に流布していたのか、或いは他の文献にあつたものなのか、或いは作者が自分で作つたものなのか、聖徳太子説話の歴史の変遷の過程を見る上で極めて興味深いものである。またこの書で更に興味深いのは、江戸時代の学者達の神道、儒教、佛教に対する考え方と、それらに対する対処の仕方であり、この三教についてそれを総合的に認識しようと言う思いと苦心が読み取れる事である。

いづれにしても現在この三十巻本「舊事紀」は、昭和十九年に出版された排印本が一種類しかなく容易には見ることが出来ない。それとこの排印本は約三百部分に分割された本文に詳細で膨大な注釈つまり、解義、句解、問弁などがつけられており、しか

もそれらの注釈の中には必要で有意義なものもある一方で、殆ど意味のないものも有るばかりでなく、本文が細かく分断されているために、本文全体を流しながら読み通す事が出来ない。其為他の聖徳太子伝と比較する時に極めて不便を感じる事になる。其処で今ここに其の本文だけを引き出して一本にまとめて、大方の研究の便宜に供したいと思う次第である。



(昭和19年11月15日刊行)

(題簽) 舊事紀訓解 太子 一 (第五十六册)

先代舊事本紀訓解卷之五十六

平安 松菴 三重貞亮著

皇太子本紀上

皇太子豐聰耳尊。又名厩戸皇子。又號八耳皇子。又號上宮太子。諡聖徳太子。用明天皇之皇子。母穴穗部間人皇后也。

欽明天皇。三十一年。庚寅。春二月。第四皇子橘豐日尊。納異母妹穴穗部間人皇女爲妃。

三十二年。辛卯。春正月。甲子朔。夜至四更。妃間人皇女夢有神人。容貌端麗。乃謂妃曰。吾有救世。

願。願暫宿妃腹。妃曰。妾腹垢穢。何宿貴人。神人曰。吾不厭垢穢。唯望暫生。人間。妃曰。然則妾不敢辭。唯命之從。

時神人懷然大喜。躍入口中。妃即驚寤。喉中猶如吞物。妃以爲奇。乃告豐日尊。豐日尊曰。君必有娠。而生聖人。自是以後始知有娠。時妃殊容敏動止閑爽。樞機辯悟。

秋八月五日。胎中有聲曰。人世唯大道而已矣。皇子及妃乃大奇之。

敏達天皇元年壬辰春正月朔日。妃間人皇女巡第中。到厩戸不覺而產。

女孺驚抱疾入寢殿。妃亦無恙。安坐幄內。父豐日皇子驚詢侍從會庭。忽有赤黃光自西方而來。照

耀殿內。良久而止。

天皇聞此靈異。命駕而幸。此及殿戸復有照耀。天皇大異之。詔群臣曰。此兒必有聖德也。

乃命有司。定大湯坐若湯坐。以沐浴。已而抱舉之。天皇親以襦袢受之而授廣姬皇后。皇后授豐日皇子。皇子授妃。妃乃開懷以受之。其身體薰郁甚馨。

時殿棟有聲。皇子怪使視之。有一韓錦袋。內有鈴。其頭有五形。中有五鬼形。下開如韓鐘。人皆不知其爲何物。

神託女孺曰。我是司日天大神也。而此鈴是神代之靈物。此皇子將來當興吾道。所以今授之。世人皆言。此皇子當興神道之瑞也。

三日之夕。天皇宴于群臣。而有恩賜。七日之夕。皇后宴于後宮。而有恩賜。大臣大連以下諸臣相次獻饌。是養產也。

於是定乳母三人。一人則大伴金村大連之女。一人則物部尾興大連之女。一人則蘇我稻目大臣女也。

是月讚岐國司言。去年春三月。羽香縣主物部兄麻呂園中。山茶樹下生一瓢葉。既長。開花無有二萼。鄉人奇之。遂成一瓢形。

如藥壺。孤腹有畫。或人或木。畫上有字。皆是秦字。蓋其人之名也。其畫與字俱凸而極巧妙。時有一蛇。其長六尺許。常

繚其葉。令二人不觸。嚴冬積雪。其葉無枯。其蛇不去。又兄麻呂之家有牝馬。十二月之望而生子。其頭如龍。背有鱗。終不飲乳。乃出園食瓢葉。至本月朔日。乃啣瓢葉以置

増上。踏雲飛去。所以今獻之。

天皇觀之曰。此瓢尤靈異。其字畫俱巧。前代未曾聞。朕熟思之。橘豐日皇子之兒。本月朔日方生。亦有異瑞。其所生之驗乎。

乃賜之太子。太子受之始笑。始開右手。掌中有瓢核。於是攀葉曳之。瓢頭即附葉而離。其內有一肉。形如俎豆。破而視之。有脫核處。乃以其所持之核納之。無所少差。衆皆以奇之。

時太子謂左右曰。此孔夫子、榮啓期、四皓、鬼谷先生、蘇秦、張儀九人之像也。夫孔夫子正聖也。鬼谷先生奇聖也。榮啓期及四皓實賢也。蘇秦、張儀僞賢也。其行雖相似。推微則非矣。奇哉。此瓢也。以見孔子春秋。

衆益以奇之。號此瓢曰賢聖瓢。亦曰龍馬瓢。亦曰初笑瓢。亦曰初開瓢。亦曰春秋瓢。

世人皆言。此皇子當興儒教之瑞也。自以此後。太子不言。夏四月後。能言能語。知人舉動。不妄啼泣。

(題簽) 舊事紀訓解 太子二 (第五十七冊)

先代舊事本紀訓解卷之五十七

平安 松菴 三重貞亮著

二年癸巳。皇太子二歲。春二月十五日平旦。太子東面。始開左

手。掌中有舍利。大如小豆。其色青白。放紫黃光。普照宮中。時太子合掌。再拜稱。南無佛。世人皆言。此皇子當弘佛法之瑞也。

三年甲午。皇太子三歲。春三月桃花之節。皇子與妃率太子。遊於後園。太子在抱而近皇子。皇子問於太子曰。吾兒賞桃花乎。抑賞松葉乎。太子對曰。松葉也。皇子曰。何以然也。太子曰。桃花一旦之紅也。何足賞之。松葉千年之綠也。誠堪以賞焉。

皇太子大悅。乃摩頂而抱之。其身甚香。太子瞻皇太子曰。小子今太畏太危。如登百丈之巖。泛千尺之濤也。皇太子大笑。

四年乙未。皇太子四歲。春正月。皇子第中。諸王子鬪諍譴。皇子聞之。乃執笞追之。諸王子皆驚怖而逃。太子獨脫衣而進。

皇子問於太子曰。兄弟不和。鬪諍譴。今吾欲答。則悉皆逃去而汝獨進。太子稽首拜手曰。不可階天而升。不可穴地而匿。所以自進以受笞。皇太子大悅曰。汝之岐嶷。非唯今日也。

妃乃開懷而抱之。其身甚香。凡一抱太子。數月其懷香。故後宮競欲抱之。

夏四月。高麗王遣使朝貢。此時博士覺智來。去年太子傳聞覺智有才智。使皇子奏天皇而召之。所以今來。

五年丙申。皇太子五歲。春三月。天皇立豐御食炊屋姫尊爲皇后。即太子之姑也。

是日。太子爲乳母所抱持。皇后御前。群臣將入拜。太子謂於乳母曰。當於大臣拜之時。放我於膝。及乎大臣入將拜之時。乳母乃放太子於膝。太子親整衣服。徐步逡巡。北面再拜。其威儀如成人。天皇皇后寵異之。

時乳母問於太子曰。吾皇子何爲與群臣同拜。皇后一也。太子密謂之曰。是吾天皇也。非汝之所知。

秋八月。太子謂於乳母曰。我當習文書。何不持筆墨來。乳母以告於皇子。皇子乃賜文筆書法。於是太子每日寫數字。三年而後。學王右軍書。得其骨體。流筆如電。人皆異之。

是歲。太子白皇子曰。小子願讀韓國所貢經書。皇子乃賜八經。太子獨取論語。常好讀之。天皇聞之。乃召太子而問之曰。朕聞王子常好論語。不知是何意也。太子對曰。論語之書。孔子教人之語。其要唯仁而已矣。夫仁也者。德之本也。道之所由生也。此書不可不讀焉。天皇曰。吾先皇之道。是不亦仁乎。太子曰。本朝異國同天地間。東儒西儒何以異道。天皇大悅。乃曰。善哉王子之言乎。世人皆言。太子年甫五歲。能悟儒道大意也。

六年丁酉。皇太子六歲。冬十一月。百濟國獻經論二百餘卷。時天皇試命太子閱之。乃問曰。經論大意何如。太子對曰。經論雖多。唯說眞諦俗諦。非有非无。諸惡莫作。衆善奉行。此其大意也。天皇以稱善。世人皆言。太子年甫六歲。能悟二佛法大意也。

十二月。高麗博士。百濟沙門。集會于蘇我大臣之家。論議儒佛優劣。往復諍擾。通事莫辨。時太子在傍聽之。謂乳母曰。博士、沙門、俱无見識。妄執己見。以汚聖經。哀哉。

七年戊戌。皇太子七歲。春三月十九日。天皇謂於太子曰。吾國神道既足矣。不須以他求也。方今儒佛二教西來。將盛。朕則不肯信。王子雖年幼。聰明達識。不知其意何故也。太子稽首拜曰。陛下知其一而未知其二也。臣熟覽神史及儒佛之書。見得其意。无所疑惑。夫神道者根本也。儒教者枝葉也。佛法者花實也。不可无焉者也。陛下請以三神道爲根本。以儒佛爲羽翼。天皇曰善哉。

是歲。太子燒香。以閱百濟所貢經論。自二月至冬一遍了。又奏曰。月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、是爲六齋日。是日梵天帝釋降鑒國政。故禁殺生者是仁之基也。天皇乃勅天下。六齋日禁殺生之事。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 三 (第五十八册)

先代舊事本紀訓解卷之五十八

平安 松菴 三重貞亮著

八年己亥。皇太子八歲。冬十月。新羅國獻佛像。太子使皇子奏曰。西天聖人釋迦牟尼佛遺像。末世尊之。則銷禍生福。蔑之則招災縮壽。今佛像則是也。且臣讀佛經。其旨微妙。仰願陛下崇敬佛像。如說修行。天皇大悅。安置供養之。

九年庚子。皇太子九歲。攝津國司奏曰。有土師連八島者。善歌極妙。世無倫類。每夜有來相和而歌。其聲非常。八島異之。施從其所。到住吉濱。天曉入海。太子侍側。奏曰。是熒惑星也。天皇大驚問之。太子對曰。天有五星。主五行。象五色也。歲星色青主東。木也。熒惑色赤主南。火也。此星降化為人。遊童子間。好作謠歌。歌未然事。蓋是星也。天皇大恐。是月宴群臣于大殿。時蘇我大臣。物部大連。威福隆盛。已而天皇問於太子曰。此兩臣孰優。太子對曰。馬子是才勝德。守屋則氣勝德。蓋氣勝德者早亡。才勝德者晚亡。若夫德勝才氣。才德兼備者。則子孫累世。家門永昌。夫燈將滅。方增光。人將亡。方增威。寡德有威者。其滅必不久。豈可不懼哉。嗚呼兩家先公德澤不久而滅矣。悲夫。天皇聽之。唯唱然而歎焉耳。

十年辛丑。皇太子十歲。春閏二月。蝦夷數千寇於邊境。天皇召群臣。議征討之事。太子侍側而聽。群臣議。天皇乃問於太子曰。吾子意何如。太子對曰。小子何足以議大事哉。雖然。今群臣所議。皆殺人。之事而非為民父母之道也。小子以為。先召魁帥。深加教諭。取其重盟。放還本國。加賜重祿。奪其貧性。則可也。天皇大悅。乃勅群臣。召魁帥綾糟等。詔之曰。嗟爾蝦夷。大足彥天皇之時。應殺者斬。應赦者放。朕今欲遵前例。以誅元惡上。

於此是。綾糟等大怖畏。乃到泊瀬川。面三諸山而盟曰。臣等蝦夷。自今以後。子々孫々。用清明心。奉事天闕。臣等若違盟者。天地諸神。天皇之靈。絕滅臣種。自是以後。久不寇邊。十有一年壬寅。皇太子十一歲。春二月。太子率三童子三十六人。遊後園中。左侍二人。右侍二人。左立四人。右立四人。以二十四人。為兩陣。列于庭前。使之共揚聲各言其志。或戲言。或實語。或長或短。太子坐榻。仰首而聽之。一々答辯。反復。无一失。如是數日。童子各歸以告父母。父母或使下。以難辭問之。太子亦能答辯。非人所及。皇子微行。屢聽其語。多不可曉者。乃謂妃曰。吾兒殆聖人歟。又太子能引強弓。世無倫類。或輕舉如雲氣。在數十丈之上。或疾走。如雷電。在前忽焉。在後。其身甚香。沐浴餘湯。香氣薰郁。一著人衣。數日不滅。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 四 (第五十九册)

先代舊事本紀訓解卷之五十九

平安 松菴 三重貞亮著

十有二年癸卯。皇太子十二歲。天皇與諸王及諸臣。議興任。那。太子奏曰。臣幼且愚。安能與議大事哉。雖然。蓋盡愚衷。今欲興任那。莫若用賢將。臣傳聞百濟水韋北國阿利斯登之子日羅。文武兼備。雄偉不常者也。仰願陛下。當

召^{シテ}日羅^ニ爲^ル中大將軍^ト。則^チ任^ス那^ノ之^ノ事^ヲ。可^レ舉^ゲ矣^ナ。
 天皇然^レ之^ヲ。乃^チ遣^ス紀國造押勝^ヲ。吉備海部直羽島^ヲ。召^ス百濟達^ヲ。率^テ日羅^ヲ。
 冬十月。紀國造押勝等^ヲ。還^ル自^リ百濟^ニ。乃^チ復^{シテ}命^ス曰^ク。百濟國王^ヲ。惜^シ日羅^ノ之才^ヲ。不^レ肯^セ聽^セ上^ニ。於^テ是^ニ。天皇復^{タム}遣^ス吉備海部直羽島^ヲ。強^テ召^ス。百濟國王^ヲ。怖^シ畏^シ天朝^ヲ。不^レ敢^テ違^ハ勅^ヲ。乃^チ遣^ス下恩率^ヲ。德爾^ヲ。余奴等^ヲ。副^シ日羅^ニ。而^テ來^ル上^ニ。
 乃^チ行^ク到^リ吉備兒島屯倉^ニ。天皇^ハ遣^ス大伴糠手子連^ヲ。而^テ慰勞^ス焉^ヲ。
 復^{タム}遣^ス四諸大夫^ヲ。訪^ハ日羅^ヲ於^ニ浪華館^ニ。
 是時^ニ日羅^ハ被^テ甲騎馬^ヲ。以^テ到^リ其門^ニ。乃^チ進^ミ廳前^ニ。跪拜而^テ曰^ク。於^ニ檜隈宮^ニ。天皇之時^ニ。我君大伴金村^ノ大連^ヲ。奉^テ爲^ル國家^ノ命^ヲ。使^ス海表^ニ。火葦北國造^ヲ。刑部朝部^ヲ。阿利斯登^ノ之子^ヲ。臣達率^テ日羅^ヲ。奉^テ天皇詔^ヲ。恐懼來朝^ス。乃^チ解^キ其甲^ヲ。以^テ獻^ス天皇^ニ。
 太子^ハ聞^ク。日羅有^ニ異相^ヲ者^ト。上^ニ奏^{シテ}天皇^ニ曰^ク。小子^ヲ。望^ク隨^テ使者^ヲ等^ニ。往^キ浪華館^ニ。視^シ彼爲^レ人^ト。天皇不^レ聽^シ。
 太子^ハ密^ニ詔^ス皇子^ニ。乃^チ御^シ微服^ヲ。從^テ諸童子^ヲ。入^リ館觀^シ之^ヲ。
 日羅^ハ在^リ牀四望^ス。指^テ太子^ヲ曰^ク。此童子^ハ。是^レ神人也^{ナリ}。于^レ時太子^ハ服^シ粗布衣^ヲ。垢^レ面帶^レ繩^ヲ。與^テ牧馬童^ト。並^ニ肩^ヲ而居^ス。
 日羅^ハ使^ス三人^ヲ引^カ太子^ヲ。太子驚^{キテ}而去^リ。日羅遙^{カニ}拜^シ脫^リ履^ヲ而走^ル。諸大夫怪^レ之^ヲ。出^デ門^ヲ而視^シ。是太子^{ナリ}也。
 於^ニ是^ニ。太子易^レ衣^ヲ而來^リ。日羅迎^{ヘテ}之^ヲ。兩段再拜^ス。諸大夫亦驚^キ。謝^{シテ}罪^ヲ再拜^ス。太子乃^チ辭讓^{シテ}直^ニ入^リ。日羅之房^ニ。時日羅^ハ跪^キ地^ヲ而合掌^{シテ}曰^ク。敬^ニ禮^ス救^フ世觀世音^ヲ。傳^フ燈^ヲ東方^ニ。粟散王^ト云云^ヲ。聞者不^レ得^レ曉^ス。太

子修^メ容折^{シテ}磬^ヲ而謝^ス。
 於^ニ是^ニ。日羅身放^ニ光明^ヲ。恰^カ如火焰^ノ。太子^ハ亦眉間放^ニ光^ヲ。恰^カ如^ニ日輝^ノ。須臾^ニ乃^チ止^ム。
 於^ニ是^ニ。太子謂^テ日羅^ニ曰^ク。卿不^レ久^ニ被^レ害^セ。命^{ナル}矣^ナ夫^ヲ。日羅曰^ク。聖人尙^タ亦不^レ免^レ。何^ニ況^ニ於^ニ我^ニ等^ニ乎^ヲ。清談^{スル}終夜^ヲ。人亦不^レ得^レ曉^ス。明日^ニ。太子還^リ玉^ヲ宮^ニ。
 於^ニ是^ニ。營^ミ館^ヲ於^ニ阿斗桑市^ニ。以^テ置^ク日羅^ヲ。供給^フ隨^フ欲^{スル}。復^{タム}遣^ス阿部目臣^ヲ。物部贊^ニ子連^ヲ。大伴糠手子連^ヲ。問^ハ國政^ヲ於^ニ日羅^ニ。
 冬十二月晦^ノ日夜^ヲ。德爾等^ヲ。殺^ス日羅^ヲ。人皆^ナ以^テ爲^ル新羅人殺^ス之^ヲ。日羅忽^チ蘇^{シテ}生^ク。曰^ク。此^ハ我^ノ驅使^ヲ等^ノ所^ニ爲^ル。非^ニ新羅人^ニ也^{ナリ}。言畢而^テ死^ス。是時^ニ。新羅人來^リ。在^リ於^ニ日本^ニ。所以^ニ云^フ爾^カ太子聞^ク。謂^テ左右^ニ曰^ク。日羅^ハ神人也^{ナリ}。彼常拜^ニ日天^ヲ。故身放^ニ光明^ヲ。冤仇弗^レ離^レ。斷^ナ命^ヲ而償^フ。捨^レ生^ノ之後^ニ。必生^ニ上天^ニ。
 十有三年甲辰^ニ。皇太子十三歲^ニ。秋九月。百濟國王^ハ遣^ス使^ヲ朝貢^シ。并^ニ獻^ス彌勒石像^ヲ一軀^ヲ。蘇我大臣馬子宿禰^ハ禮^シ拜^ス之^ヲ。乃^チ發^シ信心^ヲ而奏^シ請^フ之^ヲ。天皇乃^チ賜^ス之^ヲ。
 於^ニ是^ニ。蘇我大臣^ハ遣^ス鞍部村主司馬達等^ヲ。池邊直水田^ニ。往^キ於^ニ四方^ニ。訪^シ求^フ佛法修行者^ヲ。乃^チ於^ニ播摩國^ニ。獲^{タリ}高麗僧慧便^ヲ。還^リ俗者^ニ。於^ニ是^ニ。蘇我大臣^ハ以^テ慧便^ヲ爲^シ師^ト。度^シ司馬達等^ノ之女島女^ヲ。名曰^ク善信尼^ト。年十一歲^ニ。又^タ度^ス善信尼^ノ弟子二人^ヲ。一人^ハ則^チ漢人夜菩^ヲ之女豐女^ト。名曰^ク禪藏尼^ト。一人^ハ則^チ錦織壺^ノ之女石女^ト。名曰^ク慧善尼^ト。大臣崇^ニ敬^{シテ}三尼^ヲ。付^シ水田^ニ。直^ニ與^テ達等^ヲ。以^テ給^ス四供養^ヲ。營^ミ佛殿^ヲ於^ニ宅東方^ニ。安^シ置^ス彌勒石像^ヲ。屈^{シテ}請^フ三尼^ヲ。設^ク大齋會^ヲ。大臣復^タ建^ス佛殿^ヲ。

於三石川宅。敬禮佛像。是時司馬達等。得佛舍利於齋食上。於是。太子時々微行。散華供養。

時太子語大臣曰。凡佛法有三諦焉。曰眞諦。俗諦。中諦。是也。眞諦。是空寂之理。俗諦。是有相之事。中諦。是即空即有。苟能修三倫常。以通寂滅理。此乃菩薩之道也。若夫供養佛像。則唯前修方便耳。

是歲。太子奏曰。高麗覺智。能通儒經。願就而學之。天皇。王子。生而聰明。何學之有。太子曰。菟道太子。雖是至聖。尙學王仁。而況於愚童乎。夫儒經者。堯舜禹湯文武周公孔子。聖々相承。以治國家。平天下之道。不可不以不學焉者也。天皇聽之。

太子復奏曰。中臣御食子連者。其祖天兒屋命。能事瓊瓊杵尊。天種子命。亦事磐余彥尊。嫡々傳三神道。代々皆忠臣。願將來子孫。亦當如此也。願就而學三神道。天皇亦聽之。太子。復奏欲召博士。論儒道於朝廷。物部守屋大連不聽。所以未果。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 五 (第六十册)

先代舊事本紀訓解卷之六十

平安 松菴 三重貞亮著
十有四年乙巳。皇太子十四歲。蘇我馬子大臣。起塔於大野嶽北。設大齋會。

時太子臨而觀之。乃謂大臣曰。是佛舍利之器也。不安舍利。不得爲レ塔。釋迦如來滅度之後。碎骨舍利。應レ感而出。大臣當感得舍利。以安之。若不然。則此塔必仆。於是蘇我大臣。以慧便爲レ師。三七日持八齋戒。願感舍利。三七日後。齋食之上。得舍利一枚。大如三胡麻。其色紅白。紫光四周。浮水不沉。穿半而居。投之於水。隨心所願。而浮沉焉。鍛擊不碎。彌吐妙輝。大臣試以舍利。置鐵鑕中。振鍤打之。鑕鍤俱摧壞。而舍利依然不摧。乃納瑠璃壺。旦夕禮拜之。或爲二三。或爲五六。無有定數。太子臨而禮拜之。乃謂大臣曰。是真形骨舍利也。於是大臣設會。藏其所感舍利。於塔柱頭。

是時。大臣有疾。問於二卜者。卜者對曰。父時所祭佛神之祟也。乃遣子弟。以狀奏聞。

天皇謂太子曰。吾國之基。以神爲主。而今大臣。請祭異國之神。當如之何。太子奏曰。諸佛世尊。其道微妙。諸神從之。不敢違佛。今大臣。請興隆佛法。是國家之福也。於是天皇詔曰。宜遵二卜者之言。而祭中父所祭之神。大臣奉詔。禮二拜石像。乞延壽命。

是時天下疫病流行。民死者衆。三月朔日。物部守屋大連。中臣勝海大夫。奏曰。陛下。何以不肯用二臣等言。自先天皇。及於陛下。疫病流行。國民將絕。非下是蘇我臣等。興行佛法之故耶。盍速斷三滅佛法也。制曰可。太子奏曰。二臣。未嘗識因果之理。夫修善則福臻。行惡則

禍來。是自然之理。如來之教也。臣聞妖不勝德。古之聖人。能以德銷災。故有唐水殷旱之事。然則今之疫病。亦當以德除之焉耳。何更滅三將之興之法。能免三將死之命耶。蘇我大臣。亦奏曰。先天皇之時。輕用物部尾輿。中臣鎌子。不知天心之議。燒佛像。火堂塔。即日天忽燒大殿。疫氣益盛。翌年之夏。天賜靈材。造佛像。疫氣即止。天下安穩。是後陛下。背乎天心。不信佛法。所以今亦疫病流行。仰願陛下。弘通佛法。以除災禍。天皇遂不聽。於是。物部守屋大連。親詣於寺。踞坐胡床。乃命奴僕。斫倒堂塔。毀破佛像。縱火燒之。餘燼佛像。棄之於浪華掘江。是日無雲。大風大雨。大連乃被雨衣。訶責蘇我大臣之徒。乃遣佐伯造御室。召善信等尼。蘇我大臣。不敢違命。惻然啼泣。喚出尼等。付於御室。有司。乃奪其法衣。就海石榴市之亭。皆加答辱之。太子謂皇子曰。禍於是乎始矣。是時天下發瘡。死者不可枚舉。其患瘡者。皆言如燒。如打如摧。啼泣而死。天下老少。皆相謂曰。是燒佛像之祟也。太子謂皇子曰。如來教法。滅而更興。興而更滅。如今二臣破法之報。致此瘡疾。應祈禱而脫之。於是。皇子與太子俱燒香禮佛。夏六月。蘇我馬子大臣奏曰。臣之疾病。至今未愈。非三寶力。難可救治。於是。天皇詔馬子大臣曰。卿可獨修佛法。其他則所禁也。

乃以三尼還付大臣。大臣歡然大喜。新營精舍。供養三寶。佛法流布。權輿於此。秋八月。天皇崩。九月。太子之父。橘豐日尊。即天皇位。是用明天皇。用明天皇元年丙午。皇太子十五歲。春正月。立異母妹穴穗部間人皇女。爲皇后。即太子之母也。天皇爲人。質樸儉約。而不好酒。無樂。遊獵。守屋大連。驕奢。好酒。甚樂遊獵。穴穗部皇子爲人。太類大連。所以常議而欲君之。天皇即位。故大連不悅。太子奏曰。臣相二天體。聖壽不長。繼兄踐祚。願施仁德。雖居諒陰。不可不勤。天皇密告太子曰。朕但憂三子胤孫之不。續耳。不憂朕壽命之不。長也。太子對曰。此過去因也。臣身僅脫。及于三子孫。尸解登仙。魂胎蓮華。亦復何恨。二月。太子奏曰。秦字與國語。異音同義。雖然。人未之知。唯徒用他音耳。在昔菟道太子。獨能曉其義。而史家粗傳。以爲家祕。而不教之。故世鮮知之者。仰願以二國音附之秦字。而使讀漢書。以曉其義。制曰可。於是。太子。擇秦字一萬三千字。以國音附其傍。名之曰點。已乃先點論語。論語左傍。曰呂牟期。右傍曰阿解都羅比護登。學而第一左傍。曰雅久慈陀伊以知。右傍曰摩那尾鐵斯伽毛都爲途比登都珥阿多留。已下章句。隨義附點。亦皆如

此。自是以後。本邦得讀漢文而曉其義。天下皆悅。是月。太子密奏曰。叔父將不和於姑后。二臣將不和於天下。天皇聞而知之。歎天下之不穩。

秋八月。太子欲興隆儒學。乃奏而會集群臣於朝廷。置八經於寶機。而掛孔子畫像。太子親燒香稽首四拜。使覺智講演孝經。福利譯音之。守屋大連。聞之大怒。執杖而來。作下擊覺智之狀。訶之曰。吾神道玄遠。不惻。周旦孔丘。何以知之。皇子雖聰明。尚瓢髮少童。安能識大道之微哉。自今以後。不可入外國書於朝廷。諸臣皆退。太子從容謂大連曰。天非人所留也。地非人所振也。時至。則誰能遮之。理極。則誰能無之。大連請更商量。大連默而退。時覺智泣涕滂沱。以訴太子。太子曰。時節未到。請俟他日。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 六 (第六十一册)

先代舊事本紀訓解卷之六十一

平安 松菴 三重貞亮著

二年丁未。皇太子十六歲。夏四月。天皇新嘗於磐余河上流。乃得病而還於宮。於是太子日夜侍病。不解衣帶。天皇一飯。亦一飯。天皇再飯。亦再飯。憂醫無術。悲祭無驗。親擎香爐。祈禱佛神。音不絕響。

時天皇詔群臣曰。朕欲歸三寶。卿等當議之。物部守屋大連。中臣勝海連曰。當敬二國神。何敬他神。臣等由來未嘗識如此之事也。

蘇我大臣曰。今此詔者。非是關於寶祚之事。唯是爲後生菩提耳。安得不奉詔而生異議耶。於是。皇太子押坂彥人尊。引豐國法師。以見天皇。天皇禮法師。聽其說法。而悟離生死迷闇。以得菩提涅槃。時太子大悅。謂於蘇我大臣曰。三寶妙理。人不之知。妄生邪見。以誹謗之。如今大臣。歸依三寶。而奉詔勅。小子大歡。廻悲成喜。多謝多謝。大臣叩頭曰。賴殿下聖德。興隆三寶。臣死日。復生矣。於是。守屋大連。邪睨赫然。大怒。太子謂左右曰。大連不識因果理。而今將亡。悲夫。

是時。穴穗部皇子。與守屋大連相議。欲王天下。大連素與穴穗部皇子善。而惡彥人太子爲人寬厚仁恕。欲弑彥人太子。立中穴穗部皇子。群臣皆知其陰謀。悉背於大連。時押坂部史毛屎。潛來告於大連曰。今群臣等。圖明府君將斷其路。大連愕然。大驚。即退阿都之宅。而集聚人衆。中臣勝海連。亦於家集衆。以欲援大連。遂作彥人太子像。與竹田皇子像。以厭之。己而知事難濟。乃歸附彥人太子。水汎宮。蘇我大臣。遣太子舍人迹見赤檮殺之。守屋大連。使二八坂大市造。小坂漆部造。謂於蘇我大臣曰。吾聞群臣圖我。我則故退。

已而天皇病篤。時鞍部多須奈奉爲天皇。出家修道。亦造丈六佛像及坂田寺。太子垂淚握其手曰。我雖庸愚。賴子崇法。況復千秋萬歲後。我何以遺冥助福慶乎。是月九日。天皇崩於大殿。時太子躍哭將絕數矣。及其屬續。太子携大臣頸。叫泣絕而復蘇。大臣相提慰洩焉。六月。守屋大連。使三人弑皇太子押坂彥人尊。太子聞之。喟然歎之曰。皇太子。足以王天下矣。何不幸而遇弑。大連。累世忠臣之家。而何惡逆如レ此也。噫。是月。炊屋姫皇后。詔蘇我大臣曰。穴穗部皇子。朕親倫也。然惡逆無道。阿黨大連。咒詛天皇。又殺三輪逆。宅部皇子。其與黨也。卿當速殺二皇子。以平天下逆亂。大臣乃將遣佐伯連丹經手。土師連磐村。的臣眞嚙。殺二皇子。時太子謂於大臣曰。人之所以重者。皆在於生命耳。彼二皇子者。天皇之天倫也。議其罪源。應處輕典。願君寬恕。以謫他國。大臣不聽。曰。大義滅親。遂殺二皇子。於是太子謂左右曰。大臣亦昧因果理。亦復難免乎。秋七月。炊屋姫皇后。詔泊瀬部皇子等。及蘇我大臣曰。物部大連。雖是世臣。惡逆無道。咒詛天皇。弑害太子。其罪不容誅。卿等當速討之。以治天下亂。於是。以泊瀬部皇子。爲大將軍。蘇我大臣。爲副將軍。竹田皇子。浪華皇子。春日皇子。紀臣男麻呂。巨勢臣比良夫。膳臣賀陀夫。葛城臣烏那羅。秦連河勝等。共率二軍兵。以討守屋大連。又大伴咋子連。阿部臣平群。神手臣等。率兵從志紀郡。會於瀝河。共討大連。先是。守屋大連。預集諸國軍兵。悉率子弟一族。而築稻城以據之。每夜有光丸。大連謂左右曰。此何祥也。對曰。明府君。是饒速日尊之後。足王天下矣。而今君臣俱敬異國之神。然今獨君深敬神祇。所以八百萬諸神擁護。將以授寶祚於君之瑞也。大連聞之大悅。及其接戰。賊軍強盛。填家溢野。王師怖畏。三回敗北。先是。太子居喪。不預乎官軍。時炊屋姫皇后。詔太子曰。即今官軍。爲賊失利。寶祚將傾。朕願皇子雖年少。聖文神武。非人所可側。冀往以救之。於是。太子出殯宮。隨軍後。運其策曰。官軍雖寡。皆勇且智。來圍以吞敵。賊軍雖衆。皆愚且亂。受圍爲所吞。雖然。亂者却盛。勇者則怖。愚者却強。智者則弱。能圍者却所追。所圍者則能追。是知國中凶神邪鬼。戮力與勢也。自非賴天之靈。則不可得成功。乃命秦川勝連。以白膠木。刻作四天王像。置之頂髮。而發願曰。今使我勝敵。必奉爲護世四天王。建立精舍。蘇我大臣發願。亦復如此。已而進軍相戰。太子乃進在先鋒。時守屋大連見之。親登衣摺朴枝間。而出大音曰。此矢非吾所射。即物部府都大明神所射之矢也。乃引弓射之。其矢中太子鎧。太子。乃命舍人迹見赤擣。以四天王之矢射大連。其矢即中。

大連之胸。礪々、墮^ツ於^ニ樹^ノ下^一。賊軍驚怖。秦河勝連直入城內、斬^ニ大連^ノ首^一。

於是。將軍及軍卒。皆入大連家。賊軍敗績。子弟眷屬。離散四方。大連資材田宅。悉皆付^ニ佛寺^ニ。唯以^ニ大連私田萬頃^ヲ。賜^ニ秦連河勝^ニ。迹見赤擣^ニ己而^ニ於^ニ玉造岸上^ニ。營^ニ四天王寺^ヲ。於^ニ大和飛鳥地^ニ。營^ニ法興寺^ヲ。

是月二十一日。葬^ニ天皇^ヲ於^ニ河內科長中尾山陵^ニ。時太子斬服步行相從。兩足流血。攀^テ輿^ヲ強^キ進^ミ。下^ニ梓棺^ヲ之時。躍^リ叫^テ擗^シ踊^シ。絶^ニ而更^ニ蘇^ル。觀者大哀。無^レ不^レ流^リ涕^ヲ。是時天陰。微雨數矣。人皆言。此太子孝感之所^ニ致^ス也。

八月二日。炊屋姫皇后。及群臣。勸進泊瀬部皇子。即^ニ天皇位^ニ。是爲^ニ崇峻天皇^一。

（題簽）舊事紀訓解 太子 七 （第六十二册）

先代舊事本紀訓解卷之六十二

平安 松菴 三重貞亮著

崇峻天皇元年。戊申。皇太子十七歲。春三月。百濟國王。遣^ニ恩率^ノ首^ヲ信^ヲ。德率^ノ蓋^ヲ文^ヲ。那率^ノ福^ヲ富^ヲ。味身^ヲ等^ヲ。朝^シ貢^シ。並^ニ獻^セ佛舍利^ヲ。及^ニ僧慧聰^ヲ。令^ニ斤^ヲ。慧寔^ヲ。聆照^ヲ。令^ニ威^ヲ。慧衆^ヲ。慧宿^ヲ。道嚴^ヲ。令^ニ開^ヲ等^ヲ。寺工大良末^ヲ。太文賈^ヲ。古子^ヲ。鑑盤^ノ博士將德白^ヲ。味淳^ヲ。瓦博士麻奈父^ヲ。奴陽貴^ヲ。文陵貴^ヲ。文昔^ヲ。麻帝彌^ヲ。畫^ニ工^ヲ白^ヲ如^ヲ。其表曰。

百濟國王。謹奏。承陛下紹^ニ基^ヲ踐^ニ祚^ヲ。肇^ニ興^ニ佛道^ヲ。漢帝東流之夢。法王西來之猷。於^ニ今^ニ驗^ス矣。傳^ニ燈^ヲ聖皇。復誕^ニ附神^ノ之下^ニ。立^ニ禮^ヲ眞人。重出^ニ馬臺^ノ之前^ニ。臣等不^レ勝至喜。貢^ニ渡^ニ三藏^ノ大師律學比丘^ヲ。伏^ニ請^ヲ陛下。照^ニ佛日^ヲ於^ニ若木^ノ之鄉^ニ。掩^ニ慈雲^ヲ於^ニ扶桑^ノ之國^ニ云々

時太子大悅。問^ニ諸僧^ニ以^ニ大義^ヲ。諸僧妙會。潤^ニ以^ニ微言^ヲ。

天皇密謂^ニ太子^ニ曰^ク。人皆言。皇子有^ニ神通^ヲ。能^ニ相^ニ入^ニ。朕相爲^ニ何如^ノ。太子對^テ曰^ク。陛下過^ニ敏利^ニ。恐^ニ非^ニ命忽^ニ至^ニ。伏^ニ願^ニ寬恕^ヲ。容^ニ人^ノ能守左右^ヲ。勿^レ入^ニ。姦人^ヲ。天皇曰^ク。何以知^レ之。太子曰^ク。赤脉貫^ニ眸子^ニ。是爲^ニ傷害^ヲ。相^ニ天皇^ヲ乃^ニ引^ニ鏡^ヲ以^ニ視^ニ之^ニ。愕然大驚。

太子謂^ニ左右^ニ曰^ク。主上之相。是過去因。不可^ニ以^ニ轉^ニ也。若歸^ニ三寶^ニ。遊^ニ心^ニ般若^ヲ。庶^ニ幾^ニ乎^ニ其^ニ或^ニ能^ニ免^ニ一^ニ矣。

於是天皇。命^ニ群臣^ニ左右^ニ。衛^ニ護^ニ禁闕^ヲ。令^ニ近習^ニ宿^ニ宿^ニ相易^ニ。

二年己酉。皇太子十八歲。秋七月。太子奏^テ曰^ク。八方之政。以^ニ使^ニ知^ニ之^ニ。願^ニ遣^ニ使^ニ三道^ニ。以^ニ察^ニ國境^ヲ。於是天皇。遣^ニ淡海^ノ臣^ヲ蒲。往^ニ於^ニ東山^ノ道^ニ。肉^ニ人^ノ臣^ヲ鴈。往^ニ於^ニ東海^ノ道^ニ。阿^ニ部^ノ臣^ヲ牧吹。往^ニ於^ニ北

陸道^ニ。以^ニ察^ニ其^ニ國境^ヲ。三使皆復命。天皇大悅。謂^ニ於^ニ太子^ニ曰^ク。非^ニ皇子^ノ力^ニ。朕不^レ能^ニ知^ニ外國^ノ之境^ニ。

八月。天皇詔^ニ左右^ニ曰^ク。臣有^ニ權威^ヲ。則^ニ君威^ノ衰^ニ。故^ニ明君^ハ無^ニ權臣^ニ。

諸臣皆默而不^レ言。時太子奏^テ曰^ク。國無^ニ權臣^ニ。則^ニ王者^ハ無^ニ輔^ニ。明君安^ニ得^ニ無^ニ權臣^ノ哉^ニ。蓋^ニ古^ノ之^ニ明君^ハ。能^ニ修^ニ仁德^ヲ。君^ハ仁^ニ。則^ニ臣^ハ必^ニ好^ニ義^ニ。臣^ハ義^ニ。則^ニ自^ニ無^ニ擅^ニ權^ヲ。威^ニ若^ニ君^ノ欲^ニ三^ニ妄^ニ奪^ニ臣威^ヲ。則^ニ必^ニ有^ニ叛

之^ニ臣^ニ。若^ニ一^ニ臣^ノ叛^ニ之^ニ。衆臣則皆叛。衆臣皆叛。干戈則動。豈^ニ可^ニ不^ニレ

慎哉。天皇亦默然。

是後。太子避近臣。密奏曰。夫明君。能修德。自制其臣。其次。則能密語。以謀制其臣。其次。則顯言先威。反爲臣所制。陛下請擇乎。此三者。

是歲。太子奏曰。上古。皆淳朴正直。雖未有教。而道在其中矣。故唯一神道而足焉。中古。則人心稍生邪曲。故依仁義之教。而道於是乎行矣。此儒教之所由而來也。至於末世。則人心彌生邪曲。非說因果報應之理。則人莫有以行。道矣。此佛法之所由而來也。仰願陛下。當下勅詔。以神道爲根本。儒佛爲羽翼焉。

三年庚戌。皇太子十九歲。春三月。求法比丘尼善信等。自百濟而歸。太子。於天皇御前。試問戒律義。善信尼等。不能答辯。天皇曰。即今眼前。有此三藏大師在焉。何必遠問於海外之國耶。

冬十一月。太子加元服。群臣皆賀之。

四年辛亥。皇太子二十歲。秋八月。天皇詔群臣曰。朕今欲建任那。未知卿等爲何如。群臣奏曰。此先皇之志也。安得建哉。

時太子獨奏曰。新羅豺狼。貧婪難量。外稱相從。內實相叛。今雖興軍。恐不成功。況復宮庭。近有血臭乎。冬十二月。差紀男麻呂宿彌。巨勢比良夫臣。大伴嚙連。葛城烏奈羅羅臣。爲將軍。諸臣連等。爲裨將部隊。領二萬六千人。往於筑紫。

時太子謂左右曰。此軍不遂。雖行而止。徒費人力。莫若停止。天皇聞之不悅。

五年壬子。皇太子二十一歲。春二月。天皇密謂於太子曰。天尊地卑。乾坤定矣。君南面。臣北面。貴賤位矣。此乃理之常也。而蘇我臣。內縱私欲。外偽仁義。雖有安天下之功。且興如來之教。然無有和順謙恭之心。不知皇子以爲何如。太子奏曰。三綱五常。雖聖人難全。陽九百六。愚臣必爲害。如今大臣。可謂驕臣矣。夫佛教有六波羅密。就中忍辱。佛之所深誨也。臣願陛下。能行忍辱。以有推移。樞機一發。榮辱之主。一言之失。駟馬不追。豈可不慎哉。仰願陛下。鉗口勿輕言。

天皇爲人。勇壯。不容物非。太子常納諫。數矣。冬十月。有入獻野豬。太子侍側。天皇親拔劍斬豬頭。慨然曰。何日當斬朕所憎之人。如比耶。太子驚駭。密奏曰。禍始於此。謀唯在密。當賜宴群臣。以滅其口也。於是宴群臣左右宿衛之人。各有恩賜。太子乃戒之曰。卿等必勿以今日勅告。於他人。

時妃大伴小皇子姬。寵衰甚。怨天皇。於是使人告於蘇我大臣。蘇我大臣。聞之大驚怖。召東漢直駒。謂之曰。卿爲我弑天皇。其報德。任卿之意。駒之爲人。癡驕。且有膽力。而亦得出入禁中。於是夜入宿衛之中。問天皇起居。聞其安寢。直入拔劍。以弑天皇。時十一月三日也。於是蘇我大臣。遣三人捕諸驚怪者。人皆識。

而不^{ドモ}言^ハ

太子^{ミコ}聞^シ而^{シテ}大^{イニ}哭^ケ曰^ク。主^{ミコト}上^ニ。不^レ用^ヒ二^ニ臣^ガ之^ヲ言^フ。終^ニ遇^ヒ二^ニ弑^ス害^ニ。是^レ過^ミ去^リ報^ケ也^ニ。然^レ。大^{オホ}臣^ノ。不^レ脱^レ其^ノ報^ヲ終^ニ至^ル。駒^{ウマ}雖^モ諂^ニ大^{オホ}臣^ニ。亦^モ復^タ不^レ免^ス。噫^ア。

已^ニ而^{シテ}蘇^ソ我^ガ大^{オホ}臣^ノ。報^ズレ駒^{ウマ}甚^ニ厚^シ。賜^{タマフ}物^{モノ}無^シ數^ズ。出^{シテ}入^リ宅^ニ第^ニ。不^レ拘^ハ二^ニ内^ノ外^ノ。偷^{カニ}奸^ス二^ニ大^{オホ}臣^ノ女^メ河^カ上^ニ嬪^ニ。

大^{オホ}臣^ノ大^{オホ}怒^リ曰^ク。漢^{アヤノ}奴^{ヤツ}。雖^モ用^ヒ二^ニ我^ガ言^ヲ以^テ弑^{スト}主^{ミコト}上^ニ。何^ニ由^テ得^ル二^ニ奸^ス二^ニ我^ガ女^メ耶^ヤ。且^ツ夫^レ此^ノ奴^{ヤツ}。手^{ツカ}弑^{シテ}主^{ミコト}上^ニ。使^ム吾^ガ惡^ヲ名^ヲ傳^ヘ於^ニ二^ニ千^チ歲^{サイ}。誠^ト可^レ憎^ム哉^ヤ。乃^チ命^メ二^ニ物^{モノ}部^ノ。於^ニ其^ノ庭^ニ前^ニ。懸^{シム}二^ニ髮^ヘ樹^キ枝^ニ。大^{オホ}臣^ノ親^ニ引^キレ弓^ヲ而^{シテ}責^メ之^ヲ曰^ク。汝^チ雖^モ用^ヒ二^ニ我^ガ言^ヲ。而^モ弑^ス主^{ミコト}上^ニ。其^ノ罪^ノ一^{ナリ}也^ニ。汝^ガ性^ノ癡^{ニシテ}驕^{ニシテ}。不^レ諫^メ我^ガ怒^リ。輒^チ以^テ二^ニ奴^{ヤツ}手^ヲ。而^{シテ}弑^ス主^{ミコト}上^ニ。其^ノ罪^ノ二^{ナリ}也^ニ。汝^ガ性^ノ淫^{ニシテ}亂^{ニシテ}。偷^{カニ}奸^ス二^ニ天^{アメノ}皇^ノ嬪^ニ。其^ノ罪^ノ三^{ナリ}也^ニ。每^ツ數^ス二^ニ一^{ヒト}罪^ヲ。即^チ放^ツ二^ニ一^{ヒト}矢^ヲ。駒^{ウマ}厲^{シテ}聲^ヲ曰^ク。吾^ガ當^ル二^ニ其^ノ時^ニ。唯^タ識^ス二^ニ大^{オホ}臣^ノ之^ノ權^ヲ。未^ダ識^ス二^ニ天^{アメノ}皇^ノ之^ノ尊^ヲ。其^ノ餘^ハ則^チ不^レ敢^テ辭^セ謝^ス。大^{オホ}臣^ノ大^{オホ}怒^リ。拔^キ二^ニ劍^ヲ潰^シ腹^ヲ。遂^ニ斬^ル二^ニ其^ノ頸^ヲ。

太子^{ミコ}聞^シ之^ヲ。謂^フ二^ニ左^サ右^{ミダ}曰^ク。弑^ス君^{ミコト}之^ノ名^ヲ。雖^モ有^リ二^ニ此^ノ誠^ヲ。千^チ歲^{サイ}之^ノ後^ニ。不^レ能^ハ雪^ム二^ニ其^ノ罪^ヲ焉^ヤ。

又^モ曰^ク。蘇^ソ我^ガ大^{オホ}臣^ノ。雖^モ好^ム二^ニ儒^ニ教^ヲ。而^モ忘^レ二^ニ文^ノ王^ノ之^ノ義^ヲ。雖^モ信^ズ二^ニ佛^ノ法^ヲ。而^モ爲^ス二^ニ調^ニ達^ノ之^ノ徒^ニ。哀^{ナル}哉^ヤ。

十二月^ニ。炊^ヒ屋^ヤ姫^{ヒメ}皇^ノ后^ニ。即^チ天^{アメノ}皇^ノ位^ニ。是^レ爲^リ二^ニ推^ス古^{コノ}天^{アメノ}皇^ノ。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 八 (第六十三册)

先代舊事本紀訓解卷之六十三

平安 松菴 三重貞亮著

推^ス古^{コノ}天^{アメノ}皇^ノ元^ノ年^ニ癸^ノ丑^ニ。皇^{ミコト}太^{ミコ}子^ノ二^ニ十^ニ二^ニ歲^ニ。春^ノ正^ノ月^ニ。立^ツ二^ニ法^ノ興^ノ寺^ノ利^ノ柱^ノ。太^{ミコ}子^ノ臨^シ禮^シ之^ヲ。以^テ百^{ヒャク}濟^ノ所^ニ。獻^ル二^ニ舍^ノ利^ノ安^ノ其^ノ心^ヲ。舍^ノ利^ノ放^レ二^ニ光^ノ再^ノ三^ノ廻^ヲ。觀^ル者^ノ大^{オホ}歡^{ニシ}喜^ス。

夏^ノ四^ノ月^ニ。天^{アメノ}皇^ノ詔^{シテ}二^ニ群^ノ臣^ニ曰^ク。朕^ハ婦^メ女^ノ也^ニ。性^ノ不^レ解^セ物^ヲ。萬^{マン}機^ノ日^ニ滋^{ニク}。國^ノ務^ノ日^ニ繁^{シク}。宜^{シク}二^ニ天^{アメノ}下^ノ之^ノ事^ヲ。悉^ク啓^ス二^ニ東^ノ宮^ニ。即^チ日^ニ立^ツ二^ニ太^{ミコ}子^ノ爲^ス二^ニ儲^ノ君^ニ。萬^{マン}機^ノ悉^ク委^メ焉^ヤ。

時^ニ太^{ミコ}子^ノ固^{シテ}辭^セ曰^ク。臣^{ニシテ}天^{アメノ}性^ノ愚^{ニシテ}昧^{ニシテ}。志^{ニシテ}耽^ル二^ニ玄^ノ極^ニ。遊^{バシ}二^ニ魂^ノ彼^ノ岸^ニ。銷^ス二^ニ意^ノ道^ノ場^ニ。過^リ去^リ之^ノ世^ヲ。身^ノ歷^ス二^ニ數^ノ十^ニ。遷^シ二^ニ化^ノ漢^ノ土^ニ。僅^{カニ}爲^ス二^ニ王^ノ族^ニ。鍊^ツ二^ニ法^ノ通^ノ覺^ニ。期^ス二^ニ到^ル二^ニ淨^ノ土^ニ。而^モ今^ニ叨^{ニシテ}二^ニ領^ノ儲^ノ君^ニ。委^{スルニ}二^ニ以^テ二^ニ萬^ノ機^ヲ。神^ノ器^ノ難^クレ滿^ム。寶^ノ祚^ノ易^クレ頹^ム。伏^{シテ}惟^{ニシテ}陛^ノ下^ニ。紹^シ二^ニ徽^ノ號^ヲ。居^ス二^ニ紫^ノ極^ニ。御^ス二^ニ八^ノ州^ヲ。以^テ二^ニ仁^ノ壽^ノ之^ノ化^ヲ。撫^ス二^ニ三^ノ才^ヲ。以^テ二^ニ柔^ノ和^ノ之^ノ猷^ヲ。海^ノ表^ノ隨^ヒ二^ニ化^ヲ。率^ス二^ニ土^ノ因^ノ蹤^ヲ。嘉^{ニシ}瑞^ノ頻^ニ來^ニ。豐^{ニシ}穰^ノ相^{ニシ}係^ス。伏^{シテ}願^{ニシテ}陛^ノ下^ニ。擇^テ二^ニ賢^ノ良^ヲ。以^テ二^ニ輔^ノ治^ヲ。用^{ニシテ}二^ニ善^ノ哲^ヲ。以^テ二^ニ撫^ノ民^ヲ。則^チ萬^{マン}國^ノ咸^{ニシテ}寧^{ニシテ}。四^ノ海^ノ皆^{ニシテ}安^{ニシテ}。臣^{ニシテ}則^チ出^テ家^ヲ入^リ道^{ニシテ}。欲^ス二^ニ度^ノ二^ニ衆^ノ生^ヲ。興^{ニシテ}二^ニ隆^ノ佛^ノ法^ヲ。紹^シ二^ニ中^ノ耀^ヲ。玄^ノ風^ヲ上^{ニシテ}。

天^{アメノ}皇^ノ不^レ聽^ス。乃^チ勅^{シテ}曰^ク。朕^ハ以^テ君^ノ爲^ス二^ニ耳^ヲ目^ヲ。君^ノ若^シ不^レ肯^{ニシテ}聽^ス。則^チ何^{ニシテ}由^{ニシテ}治^ス二^ニ天^{アメノ}下^ノ。太^{ミコ}子^ノ乃^チ不^レ得^レ二^ニ己^ヲ。而^モ立^ツ爲^ス二^ニ皇^ノ太^{ミコ}子^ノ。天^{アメノ}下^ノ人^ノ民^ヲ。聞^{キテ}而^{シテ}大^{オホ}悅^{ニシ}。如^シ遭^フ二^ニ慈^ノ父^ノ悲^ノ母^ニ。一^ニ是^レ歲^ニ。遷^ス二^ニ四^ノ天^ノ王^ノ寺^ヲ於^ニ二^ニ荒^ノ陵^ノ地^ニ。

二^ニ年^ニ甲^ノ寅^ニ。皇^{ミコト}太^{ミコ}子^ノ二^ニ十^ニ三^ニ歲^ニ。春^ノ二^ニ月^ニ二^ニ日^ニ。太^{ミコ}子^ノ。親^{カラシメ}著^ス二^ニ神^ノ教^ノ經^ヲ。

宗徳經。以奏覽之。而興隆神道。
 三日。太子奏曰。農業者。天下之根本。生民之先務也。故古之
 聖王。皆先萬機。教而勉之。夫天有二十四節焉。地有陰陽
 邊中焉。或應節耕。或先或後。治之以人力。莫有怠
 慢。耘之培之。以水養之。然後得登。王者宜常慮之。
 垂慈加悲。以教而勸之。若其不然。則民之蚩々。何由得合
 天應節。凌氣以興。登耶。然王者。怠慢不教。民則逸遊。
 穀不登。而責賦稅害下民。是王者之罪也。積至於天。
 則必降災。是誰愆。今當置農部於國郡。以勸農業。天皇
 大悅。乃命大臣。置諸國農部。
 是日。詔太子。及大連大臣。令興隆三寶。於是諸臣連等。各
 爲君親之恩。競造佛殿。號之曰底羅。
 是歲。太子奏天皇。命博士覺哥。講經書於東宮南殿。此乃
 興隆儒教者也。
 三年乙卯。皇太子二十四歲。春三月。土佐南海。每夜有光。
 亦有聲如雷。已經三十日矣。夏四月。異木漂著於淡路島
 南岸。其大一圍。長八尺。島人不知其爲何木。以雜薪燒
 於竈。其煙氣薰郁。遠聞。乃異之以獻於朝廷。太子觀之。
 欣然大喜。乃奏曰。是沈水香也。此木名栴檀。生於南天
 竺國南海岸。夏月。諸蛇相繞。此樹冷故也。人以矢射之。冬
 月。蛇蟄乃斫而採之。其實雞舌。其花丁子。其脂薰陸。其沈
 水久者。爲沈水香。不久者。爲淺香。而今陛下。興隆佛法。
 肇造佛像。故釋梵感德。漂送此木。此佛法繁昌之瑞也。天

皇亦喜。命三百濟工。刻造觀世音菩薩像。時々放光明。
 五月。高麗僧慧慈。百濟僧慧聰等。歸化而來。此兩僧。博涉內
 外。尤深釋義。於是太子。就而問道。聞一知十。聞一知十。
 知百。兩僧相謂曰。是實眞人也。或不思而達。識見出論外。三
 年業成。道被幽顯。
 六月。聽政之日。宿訟未決者。八人共聲白事。太子一々答
 辯。各得其情。無復再諮焉。
 秋七月。太子。以神教經宗徳經。賜物部獲小子連。乃使之
 講神道。又命忌部卜部。互通宗徳齋元。此時家無私秘。教
 盛行。
 八月。大臣大連。及群臣。共上尊號。曰豐聰耳皇太子。又曰
 二大天王皇太子。太子辭而不受。
 四年丙辰。皇太子二十五歲。夏五月。太子謂慧慈法師曰。法華
 經中。此句有脫字。師之所見者何如。法師啓曰。他國之經。
 無有脫字。太子曰。吾昔所持之經。則有此字。法師曰。殿
 下所持經。在何地乎。太子微笑曰。在隋國衡州衡山寺般若
 臺上。法師大奇。合掌禮拜。
 冬十一月。法興寺落成。勅慧慈慧聰。始住法興寺。太子乃
 奏。設無遮會。時有一紫雲。形如華蓋。降自上天。圓
 覆塔上。又覆佛堂。變爲五色。或爲龍鳳。或如人畜。良
 久向西而去。太子合掌目送。謂左右曰。此寺感天。故有
 此祥。然三百年後。草露霑衣。五百年後。殿堂廢亡。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 九 (第六十四册)

先代舊事本紀訓解卷之六十四

平安 松菴 三重貞亮著

皇太子紀下

推古天皇五年丁巳。皇太子二十六歲。夏四月朔日。百濟國威德王。遣王子阿佐等朝貢。時阿佐謂掌客曰。僕聞貴國有一聖人。僕得拜觀。意願則足矣。太子聞之。直引殿內。阿佐稽首拜手。熟觀太子顔。復視左右手掌。及左右足掌。而更起再拜兩段。退而出庭。右膝著地。合掌恭敬曰。救世大慈。觀音菩薩。妙教流通。東方日國。四十九年。傳燈演說。大慈大悲。敬禮菩薩。時太子閉目。須臾眉間放白光。長三丈許。良久縮入。阿佐更起。再拜兩段而退。阿佐博識宏才。通儒佛之書。明天文相術。故太子寵異之。阿佐亦服太子之德。久留而常隨侍焉。

六年戊午。皇太子二十七歲。春三月。天皇詔大臣大連等。納兔道貝鮪皇女。爲太子之妃。是生四男三女。殖栗王。卒丸王。菅手女王。春米女王。御財王。日置王。手島女王。是也。是月。太子謂左右曰。吾常相諸氏女子。唯膳大娘。頗適吾意。天皇聞之。乃勅納膳大娘。是生五男四女。山背大兄王。茨田王。近世王。桑田女王。磯部女王。三枝王。丸子王。馬屋女王。片岡女王。是也。是時天皇甚喜。宴群臣女官。各有恩賜。夏四月。太子令諸國求良馬。由是諸國各獻良馬。凡数百

四二

匹。甲斐國所獻驪馬。四脚皆白。太子指此馬曰。是神馬也。乃留之。其餘皆還之。於是令舍人調子麻呂。飼養之。秋八月五日。太子奏曰。藥草者。保人命之要也。不可不以不畜焉。制曰可。

於是太子率群臣而入山野。教藥草種。乃使諸造掘之。是日定藥部。每二年二月八月。令掘藥草。又下令曰。年老力衰。不能耕者。掘藥草根。賣之於藥部。以給衣食。又奏於天皇。而詔新羅百濟高麗。以本邦所少之藥。代其綾羅錦繡等。以貢之。已而造藥藏。以畜自他藥。隨乞賜之。天下皆大悅。

是月。太子奏曰。醫方者。濟世救民之術也。當使有才者學之。

於是命三輪毛織香。谿羽張戸。學習醫術。置醫生數十人。已而以織香張戸。俱任藥司。立學醫院。使送掌之。乃以藥部。隸於藥司。

九月。太子試馭甲斐驪馬。忽乘雲升空。太子鞭東去。侍從仰瞻。調子麻呂。獨在馬右。直入雲中。人皆驚之。三日之後。廻轡而歸。乃謂左右曰。吾騎此馬。躡雲凌霧。到降土嶽。尋到陸奥。轉入信濃。飛如雷電。經廻三越。今得歸來。汝調子麻呂。忘疲從我。誠忠士也。調子麻呂。稽首拜手曰。臣不知履空。猶步陸地。但見諸山在脚下。而未覺其勞也。

是秋。新羅王。獻孔雀一隻。天皇視之。奇其美麗。

太子奏曰。此鳥未足^{トスルニ}奇^ヲ。有^リ鳳凰^{ト云フ}者^ノ。在^リ南海丹穴^ニ山^ニ。是靈鳥也。非^レ聖人德^ニ。不^レ能^ハ致^ス焉^ヲ。

天皇曰。朕雖^レ夢^レ得^ル見^ル足^ニ矣^ヲ。是夜天皇夢見^ニ鳳凰^ヲ。晨^ト起^キ說^ク其容^ヲ。太子賀^シ之^ヲ曰。是遐壽^ノ之表^{ナリ}也。

冬十月。鴈越國司。獻^ニ白鹿^{一頭}。其色白^ク如^シ雪^ノ。清潔^ニ無^レ比^シ。

頂高八尺。身長五尺。其角八寸。有^リ十七枝^ト。每^ト枝根^ニ。皆^{ナリ}有^レ文^ヲ。

琴斗月台鏡竹冠契龍華日車地天水龍鼎^レ是也^{ナリ}。

太子視^レ之^ヲ。改^メ容^ヲ乃^チ奏^シ曰。夫白鹿者。麒麟^ノ之徒^{ナリ}。神仙^ノ之獸^{ナリ}也。

千歲^ニ尙難^ク得^ル。盖^シ八尺者。麟^ノ之長^{ナリ}也。雖^レ獲^ニ彼^ノ麟^ヲ。巨^シ得^ニ此^ノ鹿^ヲ。

十六枝角。是仙鹿^ノ之王^{ナリ}。雖^ニ萬歲^ニ亦莫^ク有^リ。況復增^ニ三枝^ヲ有^ニ十七

乎^{ナリ}。可^レ謂^フ未^ダ曾^ト有^リ也。夫十七者。世法^ノ之數^{ナリ}也。其十數^ハ。是五倫

五常也。其七數者。五行^ト與^ニ其生剋^也。而^レ今得^ニ此者^ヲ。盖^シ陛下^ノ之

德化^ヲ。被^リ於^ニ百姓^ニ。及^ニ乎四海^ニ。故天爲^ニ吉瑞^者也。雖^レ然^ニ。其德

未^ダ及^ニ於此^ニ。則反^レ爲^ニ凶矣^ヲ。可^レ不^レ慎^ム哉。仰願^ニ陛下^ヲ。當^ニ行^ニ仁德^ヲ。

天皇愕然^ニ。驚^キ曰。朕孳々^ト克^シ己^ノ制^心。以^テ愛^ニ臣養^ニ民^ヲ。是^レ不^レ亦

仁^ニ乎。太子稽首拜^シ手^ヲ曰。仁^ノ之爲^ニ德^ヲ。廣^ニ大^ニ。無^レ邊^{ナリ}。若^シ夫克^シ己

制^心。心^ヲ愛^ニ臣養^ニ民^ヲ。則人君^ノ之常^{ナリ}也。安得^ニ以^ニ當^ニ天瑞^哉。仰願^ニ陛下^ヲ。下^ニ除^ニ今年貢稅^ヲ。庶幾^ニ乎其當^ニ天瑞^ニ矣。

天皇大^ニ悅^ビ。乃遣^ニ使^ヲ。往^ニ於^ニ六道^ニ。而分^ニ諸國屯倉^ヲ。以^テ爲^ニ三^ノ。其

一分^ハ。則代^ニ臣等田^ノ。其二分^ハ。則當^ニ來年料^ノ。而除^ニ天下今年之貢

稅^ヲ。於是^ニ。百姓殷富^シ。四海豐饒^シ。老幼嬉々^ト。歡聲滿^ニ衢^ニ。

已而放^ニ白鹿^ヲ於^ニ葛城山^ニ。永禁^ニ此山獵^ヲ。

(題簽) 舊事紀訓解 太子十 (第六十五册)

先代舊事本紀訓解卷之六十五

平安 松菴 三重貞亮著

七年己未。皇太子二十八歲。春三月。太子候^ニ望^シ天氣^ヲ。奏^シ曰。應^レ致^ス地震^ヲ。乃命^ニ天下^ニ。堅^ニ其屋舍^ヲ。夏四月。地大震^ニ。屋舍悉破^レ。

天皇詔^ニ群臣^ヲ曰。朕遵^ニ皇太子^ノ之教^ヲ。發^ニ政施^ニ仁^ヲ。以^テ除^ニ天下^ノ之貢

稅^ヲ。天何由咎^ニ我^ヲ以^ニ地動^ヲ。而苦^ニ兆民^ヲ哉。

太子奏曰。仁德廣大。自^レ非^レ聖人^ニ。則孰^ニ能盡^ニ之^ヲ。臣謹^ニ以^ニ乾道成

男^ヲ。坤道成^ニ女^ヲ。男陽也。屬^ニ天^ニ。女陰也。屬^ニ地^ニ。陰道不^レ足^ニ。則陽

迫^ニ不^レ能^ハ通^ニ。陽道不^レ填^ニ。則陰塞^ニ而^レ不^レ得^ニ達^ニ。故有^ニ地震^ノ。而

今陛下^ノ。以^ニ陰軀^ヲ居^ニ陽位^ニ。修^ニ德^ヲ則未^ダ盡^ニ。故未^ダ嘗^ニ有^ニ命^ニ四方

一^ノ言^ヲ。政道^ノ之非^ニ。又雖^レ祭^ニ天神地祇^ヲ。未^ダ嘗^ニ有^ニ祭^ニ地震神^ヲ。故

天有^ニ此譴^ヲ。伏願^ニ陛下^ヲ。行^ニ乎此二者^ヲ。

天皇大^ニ悅^ビ。詔^ニ於^ニ天下^ニ。祭^ニ地震神^ヲ。諸國置^ニ訴部^ヲ。令^ニ三民^ヲ言^ニ其政^ノ之非^ニ。

秋九月。百濟王。遣^ニ使^ヲ。朝貢^シ。并獻^ニ駱駝^{一匹}。驢馬^{一匹}。黑羊

二頭。白雉^{一隻}。此白雉甚奇。其大如^ニ鴿^ノ。尾長四尺五寸。而有^ニ華文^ヲ。其翼二重。而有^ニ珠文^ヲ。清白^{ナル}如^シ雪^ノ。其表曰。白雉尙希

有^ニ。況復^ニ其大^ニ而奇^ニ者乎^{ナリ}。雖^ニ千歲^ニ未^ダ嘗^ニ聞^ニ。而向^ニ貴國^ニ飛^ニ。

此陛下德化^ノ之瑞。所以獻^ニ之^ヲ。

太子曰。白雉。鳳^ノ之徒^{ナリ}也。當^ニ厚賞^ス之^ヲ。其餘^ハ。則彼土常獸^{ナリ}。未^ダ足^ニ爲^ニ奇^ヲ。乃奏^シ曰。天瑞雖^レ吉。屢現^ニ未^ダ若^ニ無^ニ也。去歲靈鹿

已而放^ニ白鹿^ヲ於^ニ葛城山^ニ。永禁^ニ此山獵^ヲ。

四三

現。今年靈雉來。豈可不慎哉。仰願陛下。益行仁德。天皇曰。去歲既除貢稅。今年當復何如。太子曰。民之有田。除其貢稅。則得殷富矣。若夫鰥寡孤獨。則既無有三尺寸之地。何由獲其豐饒乎哉。夫人君者。爲民之父母。安得不哀而愍之耶。昔者周文王。發政施仁。必先斯四者。詩云。嗇矣富人。哀此鰥獨。

天皇亦悅。乃詔大臣大連等。建悲田院於帝城東門。亦置諸國悲養部。以給窮民之衣食。於是太子親造周文王像。與須達長者像。以安於悲田院。天下皆大悅。

是月。太子奏於天皇。以本朝古禮。合儒佛之理。而潤二色之新制。禮儀。天下悉守其法。人道於是乎鮮明矣。

冬十月。神工鞍部鳥。自飛彈國來。先是。鞍部多須奈親入深山。而求良材。忽遇一神女。多須奈悅而愛之。遂娠而生子。其類似鳥。故名之曰鳥。天資機巧。善造屋舍。太子寵異之。乃相與議。以定規矩準繩等。及造作屋舍之法。於是。以鞍部鳥爲匠作棟梁。

八年庚申。皇太子二十九歲。春二月。新羅攻任那。天皇問於太子曰。朕聞新羅攻任那。今欲救任那。爲之何如。太子對曰。新羅。虎狼之國也。不承勅命。數侵任那。不致滅亡。彼猶不輟。臣請親領衆軍。以討新羅。而絕其種。

天皇不聽。太子重請之。於是。天皇詔曰。此事當問二大神。斷之。乃命三神巫。於三輪神宮。燒庭燎以降神。

時大神託巫曰。本朝方今大經大法將興之時也。惜乎皇太子

若不往焉。則其或至於廢滅也。若夫新羅軍。則雖無其利。於天下莫有憂焉。止々。何由使皇太子往而討之。於是。以三境部臣爲大將軍。穗積臣爲副將軍。領二萬餘兵。直擊新羅。以拔其五城。於是。新羅王。大驚怖。舉白旗。到于將軍之麾下。割其六城。以請降。將軍相議。使二人奏曰。新羅國王。已知其罪。割城以請降。強擊之。則或不可。

於是。天皇更遣浪華吉士神息。往於新羅。浪華吉士木蓮子。往於任那。以檢校之上。

時新羅王。任那王。俱遣使朝貢。其表曰。天上有神。地有天皇。除是二神。何有復畏。自今以後。兩國和睦。莫有相攻。不乾一船舵。每歲必朝。

太子奏曰。新羅奸僞。雖不可信。將軍氣緩。若使擊之。則必敗績。而況不可殺已降者乎。不若下堅守十一城。而召中還將軍等也。制曰可。

秋九月。擊新羅將軍等。皆共歸。是歲。新羅復侵任那。太子聞之。謂左右曰。果如吾所議。

九年辛酉。皇太子三十歲。春二月。太子始興宮室於斑鳩。三月朔日。太子奏曰。商賈者。天下通財之要也。當立三市於國縣。使民用交易。制曰可。於是。始立三市于三輪。乃集商賈。以二交易之。自是以後。諸國縣。皆每月三十八日。必爲市焉。天下以爲便。

五日太子奏曰。使高麗百濟。救任那有急。於是。遣大伴

昨連^{クニノミラシヲシテ} 往^{イリ}於^ニ高麗^{コウレイ}。坂本^{サカモトノミナト}糠手^{ヌカテ}臣^シ。往^{イリ}於^ニ百濟^{ハクセ}。詔^{シテ}之^ヲ曰^ク。任^ニ那^ナ若有^シ急^{キツ}。則^{ソレバ}必^{カナラ}當^{マカ}救^ス之^ヲ。
秋九月。新羅^{シンラ}間諜^{カンテツ}者^ヲ。迦摩多^{カマタ}。到^ル對馬^{タイマ}國^{クニ}。國人^{コクノヒト}乃^ハ捕^テ以^テ獻^ス之^ヲ。天^{アメノミコ}皇^{ミコ}將^{サシ}加^カ酷刑^{コクケイ}。太子^{タチノミコ}奏^{シテ}之^ヲ。竄^ス于^ニ上野^{ウツノ}國^{クニ}。
冬十一月。議^シ攻^ム新羅^{シンラ}。太子^{タチノミコ}不^カ聽^カ。乃^ハ止^ム。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十一 (第六十六册)

先代舊事本紀訓解卷之六十六

平安 松菴 三重貞亮著

十年壬戌。皇太子三十一歲。天皇詔^{シテ}太子^ニ曰^ク。今年^{コノトシ}欲^ス下^ル興^ス二軍兵^ニ以^テ征^ム新羅^{シンラ}如^レ之^ノ何^ニ。太子^ノ曰^ク。可^{ナリ}也。

春二月。以^ニ來目皇子^{キミメノミコ}爲^ス征新羅將軍^{シンラノセムシ}。授^{ケル}諸神部及国造^{モリノミヤヅクモ}伴^ト造^{ヅクモ}等^ヲ。并軍兵二萬五千人^{イツマンゴヒトサカサキ}。夏四月。將軍來目皇子^{キミメノミコ}到^リ于^ニ筑紫^{ツクシ}。乃^ハ進屯^{シンチン}二島郡^{シマノクニ}。聚^{メテ}船舶^{フナフネ}運^ブ二軍糧^{イクサノカシ}。

六月大伴昨連^{オホトモノサカモト}。坂本糠手^{サカモトノヌカテ}臣^シ。自^リ百濟高麗^{ハクセコウレイ}而歸^リ。是時^{トキニ}。征新羅將軍來目皇子^{キミメノミコ}罹^ル病^{ヤマト}。未^ダ果^サ征罰^{セイバツ}。太子^{タチノミコ}聞^{キテ}之^ヲ。謂^フ左^サ右^{ミダリ}曰^ク。新羅^{シンラ}奴等^{ノコ}。厭^ス魅^ミ將軍^{セムシノミコ}。恐^{ホシ}不^レ能^ハ討^ツ新羅^{シンラ}。

冬十月。百濟僧觀勒來^{ハクセノソウノクワンリク}。仍^{シテ}獻^ル曆本天文地理遁甲方術之書^{リキホンテンモンリチノミチノミチノシヨ}。是時^{トキニ}選^テ書生^{ショウシヨウ}三四人^{サンニヒトヨリ}。使^ム之^ヲ就^キ觀勒^{クワンリク}而學^ブ之^ヲ。陽胡^{ヤウコ}史^シ祖玉^{ソウギョク}陳^{チン}學^{ガク}曆法^{リキホフ}。大友村主高聡^{オホトモノムラヌシノタカサト}。學^ビ天文遁甲^{テンモンリチノミチノミチノミチ}。山背^{ヤマセ}臣^シ日立^{ヒツタテ}。學^ブ方術^{ホウジュツ}。研究^{ケンゲイ}其術^{シヨ}。皆^ハ以^テ成^ス其業^ノ。

閏十月。參河國司言^フ。本國^{キヨクニ}桐生山^{キナノヤマ}有^リ二桐樹^{キナノキ}。傳^{ハク}說^セ神代之樹^{カミヤマトノキ}也^{ナリ}。其^ノ

長四十九丈。圍^ミ三十二尋。枯枝過^グ半^ニ。其^ノ內虛洞^{ウツロウ}。恰^カ如^シ二大室^{オホニイモ}。龍棲^{リウキ}其^ノ上^ニ。時^{トキニ}發^シ雲霧^{ウンモク}。且^ツ降^ス大雨^{オホノアメ}。其^ノ西枝三十尋。異鳥棲^{イニトリキ}是^ニ枝^ニ。其^ノ長八咫餘。尾長一丈餘。全身五色金翠^{イロノイロノキンゾウ}。而^{シテ}有^リ二紅紫光^{ベニノヒロノミチノカミ}。一尾三莖^{イツニシノ}。成^ス二十二濃淡^{ニジュニノノリノハダ}。人未^ダ知^ラ其^ノ名^ヲ。一日偶落^{イツニヒノミチノカミ}三尾^{サンニシノ}。所以^ニ獻^ス之^ヲ。

又言^ス。其^ノ洞中有^リ二佛像^{ブツゾウ}。非^ズ二金石^{キンゴクシ}。亦^タ非^ズ二土木^{コノキ}。手^テ指^シ成^ス寶壺^{ホウロ}。有^ル二金光^{キンカウ}也^{ナリ}。

太子聞^{キテ}之^ヲ。乃^ハ奏^{シテ}曰^ク。此^レ鳳尾^{ホウビ}也^{ナリ}。此^ノ鳥在^リ二丹穴^ニ。他^ノ國則希^{ナリ}有^リ。此^ノ鳥好^ム二文德^{モンデ}。而^{シテ}今來者^{イマキタマフモノ}。盖^シ由^リ陛下^{キタカミ}開^キ二神皇之紀^{カミミコノキ}。弘^{ヒロ}中^{ナカニ}儒佛之經^{ニョウブノキヨウ}也^{ナリ}。彼^ノ佛像^{ブツゾウ}。是^レ藥師瑠璃光如來^{ヤクシニョウリクヨウライ}。守護^{シヨクゴ}國家^{コクカ}佛尊^{ブツゾン}也^{ナリ}。後代龍去^{コノミチノカミ}。乃^ハ成^ス寺焉^ニ。

又奏^{シテ}曰^ク。臣聞^{キタマフ}大舜^{オホスン}之時^{トキニ}。鳳凰來儀^{ホウオウライギ}。文王^{モンメイ}之時^{トキニ}。鳳鳴^{ホウメイ}二岐山^{キヤマ}。然^{ラバ}則^ハ此^ノ鳥有^リ聖人出^ス。然^{シテ}後來焉^{キタマフ}。而^{シテ}今陛下^{イマキタマフ}。雖^シ行^{ハス}二仁德^{ニニトク}。有^リ所^ニ未^ダ盡^ス。安^ニ得^テ謂^フ之^ヲ二聖^ニ哉^{ナリ}。不^レ可^ハ三^ニ以^テ應^ズ此^ノ瑞^ニ也^{ナリ}。若^シ輒^{シテ}闕^ス之^ヲ。則^ハ反^{シテ}爲^ス凶^ニ。可^レ不^レ懼^レ哉^{ナリ}。仰^ギ願^{ハス}陛下^{キタカミ}。益^ニ行^{ハス}二仁德^{ニニトク}。

天皇覽^ミ然^{ラバ}。曰^ク。朕代屢^{ミカドノミチノカミ}有^リ二祥瑞^{ニニシヨクニ}。遵^ヒ皇太子之教^{ミコノミチノカミノミチノカミ}。益^ニ行^{ハス}二仁德^{ニニトク}。而^{シテ}有^リ復^タ所^ニ未^ダ足^ラ耶^{ナリ}。

太子^ノ曰^ク。世^ニ有^リ二重病者^{ニニシヨクニ}。鄙^{ヒナニシ}無^シ能^ハ醫^ス者^ノ。故^ニ中夭過^キ半^ニ矣^{ナリ}。王^{タル}天下^ニ者^ノ。不^レ可^ハ二以^テ不^レ愍^{マナリ}也^{ナリ}。

天皇然^レ之^ヲ。於^ニ是^ニ。建^ツ二施藥院^{シヤクイン}。於^ニ三帝城^{サンテイジョウ}西門^{セイモン}。亦^タ置^テ二諸國^{シヨクノクニ}施藥^{シヤク}部^ブ。以^テ濟^ス二民之病苦^{タタマフ}。于^ニ時^ニ。太子親^{カミ}造^リ二大己貴大神像^{オホニキキノカミノミチノカミ}。與^テ二炎帝^{エンテイ}神農^{シノノ}像^{ゾウ}。安^ク之^ヲ於^ニ二施藥院^{シヤクイン}。天下大^ニ悅^ニ。是^ノ月^{ツキニ}。天皇以^テ二鳳尾^{ホウビ}賜^ヒ太子^ニ。加^ニ其^ノ冠^ノ。太子尊^{シテ}之^ヲ。號^{シテ}曰^ク二天皇^{テンノウ}。

冠。不再冠之。

十有一年癸亥。皇太子三十二歲。春二月。征新羅將軍來日皇子。薨于筑紫。太子謂左右曰。時節未到。臣得成其功。冬十月。天皇。遷于小墾田宮。天皇。命諸僧。講。安宅

神咒經於宮庭。

時太子奏曰。先軌不可不遵也。先修火燒祭。然後隨

歡慮。

於是。修火燒祭於宮庭。忌部卜部。立左右場。設壇於殿

上。時神風頻吹。太麻風々。神明來格。昭々乎。見于火上。

奇炎直長一丈半許。天皇及群臣。大歡喜。流涕者夥矣。

十一月。太子奏。作大楯及鞆。又繪于旗幟。使武士勵勇

氣。凡軍旗繪其號。權輿於此。

是月。令秦河勝大連。講軍旅十二策。群臣皆學軍旅。

十二月。太子。始制冠品。大德小德。大仁小仁。大禮小禮。大

信小信。大義小義。大智小智。共十二階。此乃準鳳尾十二色者

也。是以當色帛縫之。撮總。其頂。如囊而著緣焉。唯元

旦著髻華。以賞其節耳。

時太子謂於群臣曰。五常全備之謂德。愛人利物之謂仁。

恭敬有節之謂禮。言行俱實之謂信。行宜無私之謂義。照

理辨事之謂智。蓋此六者。天下之大經大法也。

本朝先天皇。累世賢聖。不言而行之。異國周公孔子。能修己

以教人。今為階名者。階必依其德。有德升其階。群臣等。

當依階而勿忘其德也。群臣皆大悅。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十二 (第六十七册)

先代舊事本紀訓解卷之六十七

平安 松菴 三重貞亮著

十有二年甲子。皇太子三十三歲。春正月。始賜冠位。各有差

夏四月。太子。肇制憲法十七條。手書以奏之。其十七數

者。準白鹿角十七枝之文也。天皇大悅。群臣各寫一本。復頒

之於天下。天下皆大悅。

秋七月。改朝禮。因詔之。曰凡出入宮門。兩手押地。兩脚

跪之。而踰闕焉。則立而行。

八月。太子謂秦河勝大連曰。寡人昨夜夢。北去五六里。到

一美邑。楓林太香。卿率親族。饗寡人於林下。盛饌至矣。寡

人今將往。大連頓首啓曰。臣弊邑。恰如夢所見。即日命

駕。大連先導。其夕宿泉河北頭。

太子謂左右曰。吾死後二五十年。有一釋氏。修行崇道。

建寺於此地。此釋氏非他。是吾後身之其一也。是弟子等。尊

法傳燈。末法之初。佛教繁興。

明日。到于兔道橋。大連眷屬。袂服騎馬。乃迎橋頭。溢

滿道中。太子謂左右曰。大連親族。其家豐饒。亦手織絹練

衣服美麗。是國家之寶也。

到于木郡。大連眷屬。各獻清饗。陪從輿僮以上。二百許人皆

醉飽。太子懽然大喜。是日臨楓野大堰而宿。造假宮於蜂

岡之下。不日而成。

太子謂^ニ左右^ニ曰^ク。吾相^ニ此^ノ地^ヲ。國之秀也。南開北塞。南陽北陰。河經^テ其前^ヲ。東流^ニ成順^ヲ。高嶽之上。龍爲^シ窟宅^ヲ。常臨擁護。東有^リ嚴神^一。西有^リ猛靈^一。二百歲後。有^ニ一聖皇^一。再遷^ニ成^ノ都^ヲ。紹^ニ隆王道^一。苗胤相續^ニ。不墜舊軌^一。故吾感^ニ夢相^一。今遊^ニ此處^一。停留^ニ十日^一。乃歸^ニ于宮^一。自是以後。或年中再三。或隔^ニ一兩歲^一。或不俟^テ駕而行^キ。或調^ニ其儀^一而駕^ス。

冬十二月。使^シ黃文畫師^ヲ。山背畫師^ヲ。簀秦畫師^ヲ。河内畫師^ヲ。猶畫師等^ヲ。繪^ガ諸寺佛像^ヲ。鑄^テ其戶課^ヲ。永爲^ニ家業^一。

十有三年乙丑。皇太子三十四歲。夏四月。天皇常聽^ニ太子ノ講說^一。篤信^ニ佛法不可思議^一。發^ニ大誓願^一。命^ニ佛工鞍部鳥造^一銅繡丈六釋迦佛像^一。是時高麗國大興王貢^ス丈六分黃金三百兩。太子大悅。奏^ニ於天皇^一。厚以報^レ之。

是月。太子秦曰^ク。宜祭^ニ兔道太子^一也。臣謹以夫至富者。莫^レ若^ニ天下^一也。至貴者。莫^レ若^ニ帝位^一也。至寶者。莫^レ若^ニ壽命^一也。然此太子。則爲^ニ義棄^一天下^一。猶如^シ脫^ニ弊履^一。爲^ニ梯辭^一帝位^一。猶如^シ擲^ニ芻狗^一。爲^ニ道喪^一壽命^一。猶如^シ捨斷絃^一。加之能弘宗德齋元^一。兼宗^ニ周公孔子^一。則良可^レ謂^ニ天下萬世之師^一矣。宜祭^ニ兔道太子^一也。凡祭^ニ賢聖^一也。其利有^ニ四焉^一。報^ニ其德^一也。應^ニ天理^一也。傳^ニ其道^一也。進^ニ後人^一也。然則不^レ可^レ以不祭^一也。較然而可見矣。制曰可。於是太子親到^ニ兔道^一。以祭^ニ兔道太子^一。

秋閏七月。太子奏議^シ命^ニ諸王臣等^一。皆著^ニ冠履^一。

冬十月。太子遷^ニ于斑鳩宮^一。拜別之時。天皇垂^ニ淚^一曰。朕雖^レ爲^ニ三人主^一。唯憑^ニ皇太子^一。天下萬機。日夕下行。今遠別^ニ斑鳩^一。朕

所^ニ不^レ快^一。太子辭謝曰。臣雖^レ居^ニ別宅^一。何以敢離^ニ宿衛之下^一。天皇大喜。賜^ニ宴賜^一祿。是後太子朝騎^ニ驪馬^一。以朝而聽^ニ政^一。竟即還宮。月日無^レ怠。時人異^ニ之^一。

十有四年丙寅。皇太子三十五歲。春三月。太子在^ニ斑鳩宮^一。忽^ニ命駕^一。往^ニ椎坂北岡^一。而望^ニ平群里^一。謂^ニ左右^一曰。此地體美。二百歲後。有^ニ帝皇氣^一。

時平群神手臣聞^テ太子近臨^一。乃大驚愕。召^ニ集親族^一。相迎再拜^ニ以獻魚鳥^一。太子曰。吾歸^ニ佛法^一。不^レ好^ニ殺生^一。卿之所獻。非^ニ吾所好^一。宜採^ニ菓子美花^一而來^ニ上^一。神手臣率^ニ族人^一。競擎^ニ花果^一。近進^ニ與前^一。太子拍^ニ手受^一。賜^ニ咒願言^一。神手臣等再拜兩段。遂巡而退。

太子復望^ニ勢夜里^一。謂^ニ左右^一曰。此則無^レ氣。望^ニ區德里^一曰。三百歲後。有^ニ帝皇出^一。在^ニ平群後^一。又有^ニ臣相之氣^一。

夏四月八日。安^ニ金銅丈六釋迦佛像^一。于^ニ元興寺金堂^一。時佛像高^ニ於^ニ堂戶^一。不^レ得^ニ以納^一。堂^ニ於是^一。諸工人等議曰。破^ニ堂戶^一以納^ニ之^一。鞍部鳥伎術極^ニ妙^一。乃得^ニ不^レ壞^一戶以納^ニ之^一。堂^ニ衆皆以奇^ニ之^一。即日設^ニ大齋會^一。人民群集。不^レ可^レ勝數。是夕五色瑞雲。覆^ニ佛殿之薨^一。丈六佛像。數放^ニ光明^一。其中有^ニ如火映^一。内外者^ニ上^一。

太子奏曰。自^ニ今年^一而始。每^ニ年四月八日^一。七月十五日。設^ニ齋會^一。

五月。太子奏。賞^ニ佛工鞍部鳥之功^一。賜^ニ大仁位并淡海坂田郡水田^一。

二十町^一

秋七月。天皇謂^テ於^ニ太子^一曰。朕聞世尊所^レ說法。甚深微妙。就^テ中。勝鬘經其理最幽奧。願^ハ於^ニ朕前^一講^セ說。其義。太子辭^シ曰。臣頃將^レ製^セ疏。而思^ニ其義^一。有^リ所^レ未^レ達。請俟^下五六日。熟讀領解。然後講^ニ說^一之^一。

既而太子試講^シ。天皇命^ニ諸名僧大德^一。問^ニ其妙義^一。太子答辯無^レ滯。如^ニ懸河流瀉^一。

及^ニ其說^レ法。乃提^グ塵尾。登^ル師子座。其儀如^シ僧。妙演^ニ佛意^一。精談^ニ奧義^一。縑素皆驚^ニ耳目^一。而流^ス感淚。三日而^ニ其講^一竟。

是夜。天放^ニ金光^一。雨^ニ寶花^一。繽紛而下。其長^ニ三尺^一。滿^ニ方四町之地^一。明旦奏^レ之。天皇大奇^レ之。乃車駕而覽^レ之。即誓^下於^ニ是地^一。建^ニ精舍^一。

已而天皇謂^テ於^ニ太子^一曰。法華經者。世尊出世之本懷也。請^ニ爲^レ朕講^一說。之。太子乃奉^レ詔。亦如^シ僧儀。講^ニ說^一於^ニ岡本宮^一。

七日而竟。天皇及諸王。大連大臣以下。無^レ不^ニ信受^一焉。天皇大歡喜。乃以^ニ播磨國水田三百六十町^一。賜^ニ之太子^一。太子乃納^ニ法隆寺^一。

是歲。太子略^シ製^ニ法華勝鬘經義疏^一。而未^レ有^ニ流通^一。高麗僧慧慈以下。各在^ニ講場^一。論議紛紜。太子取捨^シ以^ニ合^ニ正義^一。於^ニ是^一有^ニ究竟之志^一。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十三 (第六十七册)

先代舊事本紀訓解卷之六十四

平安 松菴 三重貞亮著

十有五年丁卯。皇太子三十六歲。春二月。天皇詔^シ曰。朕聞昔在吾皇祖天皇。繼^デ天立^ニ極^一。賢聖相承。累世御^ス宇。踟^リ天踏^ニ地^一。克明^ニ俊德^一。敦禮^ニ神祇^一。遍祠^ニ山川^一。幽通^ニ乾坤^一。顯和^ニ陰陽^一。今當朕世。祭^ニ祀神祇^一。豈可^ニ以怠慢^一乎哉。群臣宜^ク爲^ニ竭^ニ心^一以祭^ニ神祇^一。

於是。太子及大臣大連等。具^ヘ禮^ニ以祭^ニ天神地祇^一。時太子正^ニ祭禮^一。

秋七月。太子奏^シ曰。夫震旦者。聖賢繼^ギ出。文道大行。禮儀全備。加之隣^ニ於^ニ天竺^一。梵僧直來。佛法流布。本朝神教。固無^レ不^ニ足^一。然其爲^ニ道^一。玄妙不^レ測。下智難達。仰願陛下。遣^レ使結^ニ好^一以來^ニ彼書典^一。而羽^ニ翼^一吾道。

天皇曰。善哉。皇太子之言乎。雖然。以^ニ誰^ニ爲^レ使耶^一。於是太子歷相^ニ群臣^一曰。大禮小野臣妹子。智勇兼備。則其人也。於是。以^ニ小野臣妹子^一。爲^ニ遣隋使^一。敕作^ニ禮利^一。爲^ニ通事^一。時太子親書^ニ其簡^一。其辭曰。

日出天皇。問^ニ月見^一。帝皇。朕在^ニ海蕃^一。聞^ニ貴風^一。萬蒼相隔。未^レ通焉。今謹^ニ將^ニ聞^ニ寶體安全^一。是慮^ニ同天之好^一耳。仍遣^ニ大禮小野妹子^一。謹宣^ニ述久情^一。次進^ニ方物^一。爲^ニ信如斯^一。

秋九月。太子奏^シ曰。生民之命。係^ニ乎水田^一。水田之本。在^ニ於^ニ池

塘^ニ儻^ニ當^ニ亢^ニ旱^ニ。生民恨^ム天^ヲ。天默^{シテ}而知^リ。降^ス禍^ヲ于^レ國^ニ。願^ク命^ニ二諸
 國^ニ。興^{シテ}民^ヲ築^レ池^ヲ。天皇大悅^ニ。勅^シ大臣^ニ而行^{ハシ}之^ヲ。
 冬十月。和^ニ國^ニ作^ル高市池^ヲ。藤原池^ヲ。片岡池^ヲ。菅原池^ヲ。三立池^ヲ。
 山田池^ヲ。劍池^ヲ。山背國^ニ。掘^ル大溝^ヲ於^ニ栗隈^ニ。河内國^ニ。作^ル戸刈池^ヲ依
 網池^ヲ。大津池^ヲ。安宿池^ヲ等^ヲ。遣^{ハシ}使^ヲ諸國^ニ。隨^テ其^ノ大小^ニ築^シ池^ヲ。又每^ニ
 國^ニ置^ク屯倉^ヲ。功竟^テ上奏^ス。天下無^ク亢旱^ノ之憂^ヘ。百姓有^リ富饒^ノ之樂^ヲ。十
 有六年戊辰。皇太子三十七歲。夏四月。大禮小野^ノ臣^ノ妹子^ノ。自^リ隋
 國^ニ而歸^ル。時隋國使表世清等^ヲ十二人。從^テ妹子^ノ臣^ノ。至^レ於^ニ筑紫^ニ。先
 是^{ヨリ}隋人不^レ通^ゼ本國音^ニ。謂^テ小野^ノ日蘇^ヲ。謂^テ妹子^ノ曰^ク。因高^ニ
 六月。妹子^ノ臣^ノ。及^ビ隋使等^ヲ。俱^ニ到^ル浪華館^ニ。
 時妹子^ノ臣^ノ奏^ク曰^ク。臣經^ル百濟^ノ之日^ヲ。百濟人掠^ム隋國表^ヲ。仍^テ不^レ得^ル
 上^ル。群臣議^{シテ}曰^ク。妹子怠慢^ニ。失^フ蕃國表^ヲ。罪應^ニ流刑^ス。
 天皇問^テ於^ニ太子^ニ。爲^レ之如何^シ。太子對^テ曰^ク。妹子之罪^ヲ。寔^ニ不^レ
 可^レ容^ル。雖然^ト。修^レ好善隣^ヲ者^ハ。妹子之功^ヲ也。其功足^ニ以贖^ル罪^ヲ。
 加^シ之隋國使人^ニ。聞^レ之未^レ善^{ナリ}也。天皇悅^ビ之^ヲ。赦^シ妹子罪^ヲ。
 蓋隋國報書不敬^ニ。若上^レ之則失^フ鄰好^ヲ。所以^ニ詐言^シ失^フ書^ヲ。而不^レ上^ル
 也。
 秋八月三日。隋國使表世清等^ヲ入^ル京^ニ。詔^{シテ}遣^{ハシ}饒騎七十五匹^ヲ。迎^ニ
 椿市之街^ニ。時太子微服而視^シ之^ヲ。表世清遙^{カニ}望^ミ太子所^ノ居^ニ林上^ニ
 一^ニ。謂^テ左右^ニ曰^ク。彼有^ニ眞人之氣^ヲ。經^ル其^ノ林下^ニ。下^テ馬揖去^ル。觀者異^ニ
 之^ヲ。
 隋帝書^{シテ}曰^ク。
 皇帝問^フ倭皇^ニ。使人長吏大禮蘇因高等^ヲ。至^テ具^ニ壞^ヲ。朕欽^{シテ}承^テ寶命^ヲ。

臨^シ御區宇^ヲ。思^ヒ弘^ニ德化^ヲ。覃^ニ被^ニ含靈^ニ。愛育^{スル}之情^ヲ。無^レ隔^ル遐
 邇^ヲ。知^ル皇介^ノ居^ニ海表^ニ。撫^ニ寧^ニ民庶^ヲ。境內安樂^ニ。風俗融和^ス。深氣至
 誠^ニ。遠脩^ク朝貢^ヲ。丹疑^ノ之美^ヲ。朕有^リ嘉焉^ヲ。稍暄^ニ。比如^ク常
 也。故遣^ニ鴻臚寺掌客^ヲ表世清等^ヲ。稍宣^ニ往^ニ意^ヲ。并送^レ物如^シ別
 天皇問^テ於^ニ太子^ニ。曰^ク。此書如何^シ。太子對^テ曰^ク。此天子賜^ニ諸侯王^ニ書
 式也^{ナリ}。雖然^ト。皇帝之字^ハ。是天子之稱^ニ。而用^{シテ}倭皇字^ヲ。彼有^リ其禮^ヲ。
 一往應^ニ恭而修^ニ焉^ヲ。天皇然^レ之^ヲ。
 四月。召^ス隋國使等^ヲ於^ニ朝廷^ニ。時太子卷^テ簾^ヲ。見^ニ表世清等^ヲ。其威
 儀。穆々巍々^ニ。表世清等。戰懼^{シテ}伏^シ地^ニ。不^レ敢^テ仰瞻^ス。
 太子乃責^テ之^ヲ曰^ク。隋帝之書。何由不敬^{ナリ}也。夫吾天皇。是日神^ノ
 胤^ノ。天地開闢^{ヨリ}以來。嫡々相承^{シテ}。以踐^ニ寶祚^ニ。故無^ニ姓氏^ニ。西則三
 韓^ニ。東則二夷^ニ。海外諸蕃。無上^ニ不服從者^ヲ。古往今來。有^ニ他服^{スル}
 我^ニ。無^ニ二我從^ニ他^ニ。而今隋帝居^レ於^ニ蕃^ニ。僑慢^ニ無禮^ニ。欲^{スル}以^ニ
 吾國^ニ爲^ニ諸侯列上^ニ者。何哉。我未^レ擊^レ情者^ハ。本不^ニ以^ニ彼爲^ニ臣也^{ナリ}。
 隋未^レ擊^レ我者^ハ。本不^ニ以^ニ彼爲^ニ君也^{ナリ}。我本不^ニ賴^ニ隋力^ニ治^ニ此國^ニ
 也。隋亦不^レ下^レ賴^ニ我力^ニ立^ニ中彼國^ニ也。夫如是。則兩朝敵對均等^ニ。無^ニ
 有^ニ高下^ニ。隋帝之書。何由不敬^{ナリ}也。若^{キハ}夫通^ニ信結^ニ好^ニ。則欲^{スル}
 互相^ニ爲^ニ其用^ニ者也^{ナリ}。儻^{シテ}以此即爲^ニ臣伏^ニ者^ハ。甚不可^{ナリ}也。昔在漢
 明帝。遣^{ハシ}使^ヲ往^ニ天竺^ニ。求^ニ佛法^ヲ。是非漢國降爲^ニ臣^ニ。亦非天
 竺升爲^ニ君^ニ。今吾朝之於^ニ隋國^ニ。亦復如是^{ナリ}。隋帝之書。何由不敬^{ナリ}
 也。方今雖^レ當^ニ破^ニ隋簡^ニ。誅^ニ汝等^ヲ以報^ニ中無禮^ニ。然^レ天皇寬恕^ニ
 以^ニ二字之禮^ニ。容^ニ多言不敬^ニ。後來當^ニ誠^ニ其貢高^ニ也^{ナリ}。於是^ニ表世
 清等。大驚怖^シ。稽首九拜而退^ク。五日。饗^ス隋國使^ヲ於^ニ朝廷^ニ。

九月。隋國使裴世清等。皆共歸。時復命小野妹子臣爲正使。吉士雄成爲副使。鞍作福利爲從事。俱往於隋國。天皇贈隋帝書。太子乃操筆書之。其辭曰

東天皇。問西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至。久憶方解。季秋薄冷。尊何如。想清念。此即如常。今遣大禮小野妹子。大禮吉士雄成等。往。謹白不具

時太子。奏令高向漢人玄理等八人爲學生。以往於隋國。是月十五日。太子在斑鳩宮。入夢殿內。而設牀褥。凡每三。沐浴而入。明旦談海表雜事。及其製諸經疏也。若有滯義。即入夢殿。每有三人。自東方來。告以妙義也。是日則閉戶不開。不進飲食。不召近習。妃以下。不得近之。已七月七夜矣。衆皆大異之。慧慈法師曰。殿下方今入三昧定。諸臣必勿驚之。其八日之晨。玉几之上。有一卷經。乃引慧慈法師告之曰。此吾前身修行衡山所持之經也。吾頃遊魂取來。乃指其脫字。以示慧慈。慧慈大驚以奇之。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十四 (第六十九冊)

先代舊事本紀訓解卷之六十九

平安 松菴 三重貞亮著
十有七年己巳。皇太子三十八歲。夏四月八日。太子始製勝鬘經。

義疏。是月。百濟僧道欣等十人。流著肥後國。乃聞太子風。願留。住。此國。仍安置三元興寺。

是歲。太子奏於天皇曰。神儒佛三教。是天眞至理。非出二人爲也。若不通會。政道難行。上代則人皆正直。雖不通會。政道自成。末世則人多邪曲。故不通會。政道有敗。若欲通會焉。則分爲四。通之爲二。合之爲一矣。若有偏見。無識其眞。則必有利害。乎政道。不可不以不察也。天皇答曰。朕雖不敏。遵太子教。略有通會焉。蓋儒教則唯人倫。佛法則在幽極。此乃二而非一者也。神道則本二焉。曰神代。曰王代。神道是靈妙。不測。王政是人倫之常。雖二本是一。而分爲二。此乃指此兩二而爲四者也。神道與佛法。一不乎其幽極。儒教與王政。一不乎其人倫。此乃通之爲二者也。

神道出王政。以顯其理。王政歸神道。以密其理。其理是天眞。修之以誠敬。此乃合之爲一者也。太子曰。善哉陛下之言也。能達三教。足以行政道。夫佛法者。幽極之道也。其餘功。則修人倫。儒教者。人倫之道也。其餘功。則明幽極。神道。則取其兩端。合一均理矣。蓋五倫五常者。三國三教自有之道也。知者固行之。不知者亦行之。如夫烏孝狼慈。則不必依三周孔矣。彼周孔之道。則五倫之精。五常之微。名之曰儒。知者雖能學。愚者不堪學。佛法。則具說三世。因生前善惡。成當來罪福。迷焉則永生。

死。悟焉。則得^レ涅槃。愚者畏^レ報以息^二惡業^一。知者識^レ心以復^二眞性^一。神道。則兼^二教^一而明^二其本^一矣。雖然。人代不^レ久。未^レ立^二其學^一。而少^二其教^一。故當^レ弘^二儒佛之教^一。以輔^二翼神道上焉^一耳。

十有八年庚午。皇太子三十九歲。春三月。高麗僧曇徽。法定來。曇徽能通^二五經^一。且能作^二彩色及紙墨礬磗^一。先是。本邦用^二三韓紙^一。於是。太子使^二曇徽^一始造^二和紙四種^一。一雲紙。堅而滑。用^二書^一。經典。一縮紙。剛而柔。用^二王公書^一。一白紙。柔而厚。用^二士人書^一。一俗紙。柔而薄。以用^二雜事^一。又命^二三州郡^一植^二楮教^一以^二俗紙製法^一。自是以後。天下紙貨多足。人民皆悅。

秋九月。太子駕^二驪馬^一。朝^二小墾田宮^一。過而踏^レ之。太子眇驚。還^二斑鳩宮^一。於是。驪馬不^レ喫^二草^一。亦不^レ飲^二水^一。兩耳掩^レ低。閉^二兩目^一。似^レ有^レ悔^レ過^一。太子聞^レ之。使^二三人^一令^二喫^レ艸飲^レ水^一。乃開^二目^一喫^二水草^一。

冬十月。膳^二大娘姫侍坐^一。太子語^レ之曰。汝能知^二吾意^一。而觸^レ事不^レ違。我得^レ汝者。吾之幸也。吾死之日。同^レ穴共^レ埋。大娘姫啓^レ曰。殿下恩深。賤妾侍^レ寢。常思^二千秋萬歲^一。如^二磐石^一。如^二大嶽^一。朝夕供奉。妾幸足矣。何以有^レ終^一乎。太子曰。不然。夫有^レ始必有^レ終。有^レ生必有^レ死。自然之理也。何由得^レ不^レ死耶。吾昔經^二數十身^一。修行^二崇道^一。僅爲^二小國儲君^一。然得^レ紹^二隆^一。三教。吾願既足矣。吾則不^レ欲^二久遊^一。五濁^一也。大娘姫垂^レ淚曰。殿下。千秋萬歲之後。妾復誰^レ之主。太子曰。汝勿^レ留意。膳大郎姫之爲^レ人也。聰敏睿悟。太子尊體有^レ癢。雖^レ不^レ命^二其處^一。即能識^レ搔^レ之。思^レ召^二群臣^一。則知^レ而召^レ之。太子所欲^レ。

凡諸爾事。即預先知。無^レ不^レ適^二其意^一。所以加^二寵異^一。而有^二三同穴之令^一。

十有九年辛未。皇太子四十歲。春正月二十五日。勝鬘經義疏成^レ功。乃使^二慧慈法師等大德^一校^レ閱^二之^一。皆讚歎誦習。不^レ加^二一字^一。不^レ減^二一文^一。頂戴崇奉。更無^二他言^一。

夏五月五日。太子整^二衣服冠裳^一。將^二群臣等^一。到^二于兔田野^一而藥獵焉。蓋重^二醫療^一也。自是以後。每^二年藥獵^一。相續而行。

是月。天皇幸^二于兔田野^一。觀^二真人逐獸^一。太子諫曰。殺生之罪。佛教最重。儒童菩薩。漸發^二其禮^一。故釣而^レ不^レ網。弋^レ不^レ射。宿^レ釋氏不^レ殺生戒。即儒教之仁也。伏願陛下。永斷^二此事^一。天皇曰。朕爲^二女主^一。好^二此殺生^一。是朕之過也。深以慚愧。自今以後。爲^二太子斷^レ之。

是時間人皇后病篤。太子色憂不^レ滿^二容^一。不^レ脫^二冠帶^一。而日夜侍焉。經^二十一日^一。皇后崩。太子哭而慟。乃入^二殯宮^一而不^レ出。其葬送之時。太子。顏色憔悴。形容枯槁。觀者皆感^レ無^レ不^レ流涕焉。

二十年壬申。皇太子四十一歲。春正月七日。太子奏曰。隋帝欲^レ以^二本朝^一列^二諸侯王^一。然臣不^レ肯^レ告^二以^二其由緒^一。恐^二隋帝不^レ悅^一。其或起^二軍乎^一。今試發^二軍以擊^二三韓^一。我弱焉。則彼必發^二軍^一。我強焉。則彼必請^二和^一。三韓近^二於隋國^一。隋國若強焉。則亦肯^二本朝^一。不^レ可^二以不^レ預備^一焉。當使^二番衆^一分爲^二二十一^一。往^二於新羅^一。置^二二十一城^一。速救^二其難^一也。天皇然^レ之。遣^二其番衆^一往^二於新羅^一。

是日太子復奏曰。自^二先天皇^一已來。新羅動^レ侵^二任那^一。其咎反在^レ

我。非^ズ必^ズ在^ニ新羅^ニ。何^ノ也。先代蒼卒^ニ。奪^テ新羅^ノ屬國^ヲ。以^テ付^レ于^ニ百濟^ニ。加^ル之^ニ新羅^ニ是大國^ニ。而每^レ年調貢^ス。久^ク而有^レ勞^ス。然^レ若^シ怠^リ焉^ヲ。則^チ有^レ責^ム而未^レ嘗^ハ有^レ德^{ナリ}也。何^ノ有^レ不^レ含^ム其怨^ヲ。今^マ雖^モ施^ス三仁^ヲ於^ニ海內^ニ。而未^モ嘗^ハ有^レ及^レ於^ニ新羅^ニ。所以^ニ新羅^ニ。雖^モ一^ニ畏服^ス。而怨^ヲ不^レ解^ス。則^チ復^シ背畔^ス。夫解^レ怨^ヲ者。莫^シ如^ク爲^レ仁^ニ。伏願^{シテ}陛下^ニ。不^レ怒^ス新羅^ヲ。待^ツ之^ニ以^レ仁^ニ。

時蘇我大臣歎^{シテ}曰^ク。富哉^{メル}皇太子^ノ之言^ヤ也。非^ズ唯^ダ防^グ新羅^ヲ。亦^タ防^ギ隋^ヲ害^ヲ焉^{ナリ}。

太子^ノ曰^ク。不^レ然^{ナリ}也。苟^{モリ}有^レ所^ロ爲^メ。而^テ行^フ之^ヲ。則^チ仁^ニ云^フ乎^ヤ哉^ニ。故^ニ孔^ノ子^ノ曰^ク。仁^者先^ニ難^シ而後^ニ獲^ス。誠^ニ哉^ニ斯^ノ言^ヤ也。蘇我大臣^ノ。赧^{トシテ}然^{ナリ}大^ニ恥^シ之^ヲ。

於是^ニ。天皇詔^{シテ}大臣^ニ大連^等。以^テ米^一萬^五千斛^ヲ。頒^チ賜^フ於^ニ三韓^ノ諸^王及其^ノ國民^ニ。

十五日。太子始^ニ製^シ維摩經^{義疏}。

夏五月。有^リ百濟^ノ歸^{スル}化^者。其^ノ面^身皆^ニ斑^白。自^ミ言^フ能^ク造^ル山^ノ嶽^ノ之^ノ形^ヲ。且^ツ知^ル懸^ノ橋^ノ之^ノ瀨^ヲ。群^臣皆^ニ惡^シ而將^ニ棄^レ之^ヲ。太子奏^{シテ}留^メ之^ヲ。

於是^ニ。斑^ノ人^造須^彌山^ノ形^ヲ。吳^ノ橋^形於^ニ南^ノ庭^ニ。太子^ノ曰^ク。能^ク知^ル懸^ノ橋^ノ之^ノ瀨^ヲ者^ハ。有^リ利^ニ於^ニ天^ノ下^ノ國^ノ家^ニ。若^シ夫^ノ能^ク造^ル山^ノ形^ヲ。則^チ唯^ニ精^巧巧^ミ耳^ヲ。乃^チ使^ム斑^ノ人^{乘^リ輿^ニ往^キ於^ニ諸^ノ國^ニ。而懸^ケ參^ノ河^ノ八^ノ脛^ノ橋^ヲ。遠^ノ江^ノ濱^ノ名^ノ橋^等。}

一^百八^十餘^ヲ。自^リ是^ニ以^テ後^ニ。往^ル來^ノ路^人甚^ダ爲^レ便^ト。太子^ノ曰^ク。愛^ス無^キ才^ヲ。美^ヲ容^ヲ。如^シ畜^ニ異^ノ毛^ノ鼠^ヲ。惡^ム有^レ才^ノ醜^ノ容^ヲ。如^シ放^ツ卑^ノ毛^ノ馬^ヲ。

是^ニ月^ニ。太子奏^{シテ}曰^ク。夫^ノ禮^者。王^ノ道^ノ之^ノ急^ノ務^也。雖^モ然^{ナリ}。有^レ禮^{無^レ樂}。則^チ或^ハ拘^リ乎^ニ品^ノ節^ニ。而^テ失^フ其^ノ和^ノ樂^ヲ矣^ニ。所以^ニ神^代有^ニ三^ノ神^ノ樂^ニ。異^ノ國^ノ聖^ノ賢^ノ。

禮樂相須^ヒ。然^ル今^ニ以^テ三^ノ神^ノ樂^ヲ用^レ二^ノ人^ノ事^ニ。則^チ有^レ所^ロ畏^{スル}懼^ニ。須^ラ試^ニ用^ニ異^ノ國^ノ之^ノ樂^ヲ。於^ニ是^ニ召^ス三^ノ周^ノ樂^ヲ於^ニ百^ノ濟^ノ國^ニ。

是^ニ歲^ニ。百^ノ濟^ノ樂^人。味^摩之^ヲ。加^シ多^ク意^ヲ。乙^ノ中^ノ芳^等。歸^{シテ}化^ニ而^テ來^ル。乃^チ曰^ク。臣^等學^ビ三^ノ舞^ヲ樂^ヲ於^ニ吳^ノ國^ニ而^テ得^レ之^ヲ。由^テ是^ニ。置^キ之^ヲ於^ニ櫻^ノ井^ノ邑^ニ。而^テ集^メ少年^ニ以^テ令^レ習^ス之^ヲ。眞^ニ野^ノ臣^ノ弟^ノ子^ヲ。新^ニ漢^ノ齊^ノ文^等。習^フ之^ヲ傳^フ其^ノ舞^ヲ樂^ヲ。已^ニ而^テ和^ヒ韓^ノ相^ノ雜^ニ以^テ奏^ス之^ヲ。然^レ世^ノ人^{樂^ム此^ノ者}鮮^{ナリ}矣^ニ。

時^ニ太^ノ子^ノ曰^ク。夫^ノ樂^也者。以^テ其^ノ所^ニ樂^ム爲^レ本^ノ者^也。若^シ夫^ノ不^レ樂^ム。則^チ樂^シモ^ン云^フ哉^ニ。

乃^チ與^ニ秦^ノ河^ノ勝^ノ大^ノ連^ノ相^ノ議^{シテ}。造^メ六^十六^ノ番^ノ假^ノ面^ヲ。三^十三^ノ番^ノ歌^ノ舞^ヲ。準^{ジテ}猿^ノ女^ノ君^ノ之^ノ傳^ヲ。號^シ之^ヲ曰^ク猿^ノ樂^ニ。於^ニ是^ニ。命^{ジテ}新^ニ漢^ノ齊^ノ文^等。熟^{シム}習^ス之^ヲ。然^レ後^ニ奏^ス之^ヲ於^ニ朝^ノ廷^ニ。世^ノ俗^皆大^ニ悅^ニ。而^テ感^ズ其^ノ恩^ヲ惠^ヲ。

是^ニ時^ニ。住^ス吉^ノ大^ノ神^ノ。託^{シテ}巫^ノ祝^ニ曰^ク。今^ニ皇^ノ太^ノ子^ノ所^ニ製^ス之^ノ歌^ノ舞^者。即^チ是^ノ吾^ノ神^ノ體^也。而^{シテ}善^ニ應^ズ乎^ニ吾^ノ朝^ノ之^ノ風^ニ。宜^ク祭^ス祀^ス之^ヲ時^ニ而^テ奏^ス之^ヲ。然^ル今^ニ願^フ於^ニ此^ノ曲^ノ之^ノ始^ニ。先^ニ見^ル吾^ノ三^ノ神^ノ之^ノ相^ヲ。我^ハ是^ノ高^ノ貴^ノ德^ノ王^ノ菩^ノ薩^ヲ。又^タ名^ヲ妙^ノ幢^ヲ。菩^ノ薩^ト。在^テ天^ニ則^チ高^ノ皇^ノ座^ノ靈^ノ尊^ヲ。在^テ地^ニ則^チ大^ノ己^ノ貴^ノ大^ノ神^ヲ。在^テ海^ニ則^チ彥^ノ波^ノ瀲^ヲ武^ノ尊^ヲ。此^ノ乃^チ一^ノ體^ノ分^ニ身^ノ之^ノ神^也。

太^ノ子^ノ聞^レ之^ヲ。乃^チ造^メ三^ノ番^ノ假^ノ面^ヲ。一^ハ則^チ白^ノ色^ヲ。以^テ象^レ於^ニ天^ニ。一^ハ則^チ肉^ノ色^ヲ。以^テ象^レ於^ニ人^ニ。一^ハ則^チ黑^ノ色^ヲ。以^テ象^レ於^ニ地^ニ。乃^チ奏^ス之^ヲ於^ニ神^ノ前^ニ。神^人以^テ和^シ。天^ノ下^ノ偕^ニ樂^ス。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十五 (第七十册)

先代舊事本紀訓解卷之七十

平安 松菴 三重貞亮著

二十有一年癸酉。皇太子四十二歲。冬十一月。太子奏作二掖上池。畝火池。和珥池。又作下自浪華至京都之大路上。

十二月朔日。太子遊觀於片岡。時有二飢人。臥於道傍。驪馬至此不進。太子加鞭。逡巡猶駐。太子自言哀々。即下馬。舍人調子麻呂。進走獻杖。太子乃步行。到于飢人之側。謂之曰。嗟爾何人也。可伶可伶。乃脫其紫袍。以覆其身。而賜歌曰。

斯那底留耶。伽多烏迦耶摩迦。伊園珥宇緣底。眾世流會能多毘比屠。阿波例於耶那斯迦。奈禮那利介米耶。嗟須多計能。紀美波耶那久母。伊園宇緣底。曾能多毘比登阿波例。

時飢人舉首報歌曰。

伊伽瑠雅能。屠微農鳥迦波能。多緣婆胡曾。和賀於保畿美能。微奈波和須禮米。

其飢人之形。面長頭大。兩耳長。目細長。開目內有金色光。身體太香。太子問於調子麻呂曰。彼飢人香否。調子麻呂對曰。太香。太子曰。汝則必長壽矣。飢人與太子相語。數十言。人皆不能曉。還宮之後。遣使視之。復命曰。飢人既死矣。太子大哀。使厚葬埋。造墓高大。

于時。蘇我大臣。及七大夫等。皆議之曰。殿下。聖徳臣測。妙跡易迷。然路頭飢人。是卑賤者。何由下馬。與之相語。復賜詠歌。及其死。厚葬之。不可三以爲天下之法也。

太子聞之。即召七大夫等。令曰。卿等宜往片岡發墓視之。七大夫等承令。往開其棺。封墓不損。棺蓋不破。無有異。其屍。棺内太香。所賜紫袍。斂物彩帛。皆在棺上。七大夫等大奇之。深歎聖徳不可思議。乃復命。

太子。日夕思慕。常誦飢人之歌。乃遣舍人。取所斂衣服。而著之。如故。時人太異之曰。唯聖與聖。乃能知之。信哉。是歲九月十五日。維摩經義疏成。功。

二十二年甲戌。皇太子四十三歲。春正月朔日。太子夙起。命駕朝參。時過中臣大夫御食子之門前。乃望其家曰。奇哉。此家有聖人之氣。乃使二人問之。御食子出。其門。稽首拜手曰。臣家何由有聖人。今唯荆妻產兒耳。太子曰。其產兒。必爲聖乎。向來當有佳瑞也。御食子啓曰。白狐啣鎌來。太子曰。更復有佳瑞。御食子乃求之。庭松有藤。今晨開花數十絲。太子曰。卿子孫必繁昌。

八日。太子始製法華經義疏。二十三年乙亥。皇太子四十四歲。夏四月十五日。法華經義疏成。功。

冬十一月。高麗僧慧慈。歸其本國。太子。修師資之禮。厚賜祿物。慧慈固辭曰。愚僧爲殿下之弟子。何反以殿下爲弟子。

耶。臨別流淚而啓曰。難會易別。人道之常也。一天同覆。住魂於殿下之前。愚僧望必會。淨土。珍重珍重。時太子酸鼻焉。

二十有四年丙子。皇太子四十五歲。夏五月三日。天皇病篤。太子大憂。誓願延天皇壽。建諸伽藍。即得平復。由是。大臣大連大夫以下。諸國國造。伴造等。各隨其勢。誓建寺塔。

秋七月。新羅國王。遣使獻金佛像長二尺。乃置蜂岡寺。此像放光。時々有異。太子謂秦河勝大連曰。佛像有靈。不可褻瀆。宜安清淨室。不得恣拜。凡俗愚民。若有觸犯。彼必被禍。護法善神。毘沙門天王。應不守護。大連謹奉令旨。記之以傳後世。

二十有五年丁丑。皇太子四十六歲。夏四月八日。天皇勅太子曰。皇太子。先年嘗講勝鬘經。自是以來。天下泰平。國土安穩。朕今思經義再三。遺忘。雖對其文。猶迷其義。願復於朕之前。以講演。其疏文。太子不辭。燒香乃於御前。以講演之。諸蕃法師。侍坐而聽之。三日完講。天皇大悅。大臣奏曰。皇太子所講。妙經義理。莫不入微出機。通達內外。漢皇夢見像飛東去。人能弘道。知之在今。伏惟陛下。聖無不通。情無不該。西方聖人。妙道甚深。殿下開口吐舌。金聲玉振。末劫衆生。化登淨土。五濁惡世。還爲僕法。不可思議之功。不可測量之勞。不可報之恩。謝德焉者也。

於是。天皇勅大臣。加太子湯沐之戶。年中費用。二倍常式。太子固辭。天皇不許。太子領賜所造諸寺。

六月。出雲國司。上異瓜三枚。其長圍各二尺餘。其味甘如蜜。而有美香。天皇奇之。乃問於太子曰。如何用之。太子對曰。天賜雖當御食之。然王者弗用非常。賜之臣下。則可也。仍賜諸王諸卿。諸王等。問於太子曰。恩賜異瓜。爲之如何。太子答曰。天賜之。亦君賜之。卿等益謹而喫之。

秋九月。太子命駕。出遊諾良邑。乃指東山之下曰。寡人死後。一百餘歲。有二帝皇。篤信佛道。於彼谷前此岡上。並建伽藍。興隆佛法。又指西原曰。於彼平原。亦建塔廟。徧望四方曰。此地有二帝都之氣。

是歲。五穀大登熟。而五倍例年。諸國庶民。請納例年三倍。朝廷不聽。庶民強納三倍米。於是。還二倍米。容一倍米。庶民不肯取還之。太子下令。以其一倍。還之於庶民。以其一倍。賜之於鰥寡孤獨。及閑居隱人。山中海邊民。以其一倍。分爲三分。一分。則獻之於神社。一分。則賜之於諸王及諸臣。一分。則賜之於工匠商賈等。

于時。秦河勝大連。問於太子曰。天賜專在朝廷。然今悉利貴賤。不利朝廷。何哉。太子答曰。夫人君者。民之父母也。天下有利。即君之利也。論語曰。百姓足。君孰與不足。百姓不足。君孰與足。誠哉是言也。大連感悅。

二十六年戊寅。皇太子四十七歲。春二月。太子謂大臣已下曰。

海表之國。興^{シテ}軍大^ニ戰^ス。西方大國。將^{サニ}滅^ス東方小國^ヲ。小國待距^{ナク}。大國稚主^{ナレバ}。各將^{サニ}滅^ス國^ヲ。有^リ二李姓^ヲ。將^{サニ}奪^フ神器^ヲ。隋國之運。今年盡矣。我國則無^シ事^{ナシ}。唯聞^ク舉動^ヲ耳^ヲ。又曰。秋中當^ニ聞^ク北方國事^ヲ。夏五月。太子出^デ夢殿^ヲ。朝召^ニ群臣^ヲ。令曰。悲哉^ニ可^レ痛^ム。隋國運祚。方今極矣。有^リ二李姓^ヲ者^ヲ。將^{サニ}興^ス己國^ヲ。不^レ輔^ス隋帝^ヲ。悲哉^ニ。如何大臣啓曰。漢土之俗。帝系非^レ一^ニ。太古之時。聖人揖讓^ス。其後干戈相尋^ニ。姦猾篡^フ祚^ヲ。彼國之常也。我朝相離^ニ。退居^ス東方^ニ。不^レ聞^ク流血之亂^ヲ。不^レ知^ク投^ル刀之害^ヲ。故孔子欲^ス居^ニ九夷^ヲ。臣伏願^メ修^メ仁善^ヲ隣^ヲ。俟^ニ彼修^レ禮^ヲ。太子垂^レ淚曰。卿等所^レ言^ヲ。實合^ニ道理^ニ。然寡人唯悲^ニ昔日之交^ヲ耳^ヲ。

秋八月。高麗國王。遣^ム使^ヲ朝貢^ス。因奏^ク曰。隋帝攻^ム弊邑^ヲ。以^テ三十三萬軍^ヲ。時新羅番衆。直^ニ來^テ援^フ弊邑^ヲ。而隋軍敗績^ス。仍獻^ス俘虜貞公普通二人。及鼓吹弩挽石之類十物。駱駝一匹^ヲ。冬十二月。太子命^{ジテ}駕^ニ到^リ於^ニ科長墓處^ニ。直入^リ墓內^ニ。四望^{ミテ}謂^フ造^ル墓者^ヲ曰。此處必斷^ス。彼處必切^ス。吾子孫^ハ。必不^レ相續^セ也^{ナリ}。是夕。太子相^ヒ對^シ妃^ニ而歎^ク曰。遙憶過去^ヲ。因果歷然^{ナリ}。吾未^レ之償^ハ。禍及^ニ子孫^ニ。子孫絕滅^ス。豈非^ニ大咎^ニ哉^ト。

(題簽) 舊事紀訓解 太子 十六 (第七十一册)

先代舊事本紀訓解卷之七十一

平安 松菴 三重貞亮著

二十有七年己卯。皇太子四十八歲。春正月。太子。奉^{ケテ}勅命^ヲ駕^ニ。

巡^シ檢^ス畿内諸國臣連國造伴造所^ノ建精舍^ヲ。無^キ地者^ハ賜^フ地^ヲ。無^キ木者^ハ賜^フ木^ヲ。無^キ田者^ハ賜^フ田^ヲ。無^キ圃者^ハ賜^フ圃^ヲ。經^テ三十箇日^ヲ。遂^ニ到^リ蜂岡^ニ。建^テ塔心柱^ヲ。定^メ常住僧一十口^ヲ。除^ク此^ノ之外^ヲ。不^レ持^セ戒者^ハ。即日擯出^ス。命^{ジテ}檀越河勝大連^ニ曰。當^ニ以^テ此例^ヲ。胎^ビ于^ニ後昆^ニ。已而太子到^リ淡海國^ニ。巡^シ檢志賀栗本等郡諸寺^ヲ。終駐^ス駕栗津^ニ。命^{ジテ}左右^ニ曰。吾死^ス之後^ヲ。五十箇年^ヲ。有^リ二帝皇^ヲ。遷^ス都此地^ニ。治^メ世^ヲ十年^{ナラン}。

時淡海國司啓曰。蒲生河有^レ物。其形如^レ人非^レ人。如^レ魚非^レ魚。太子謂^ニ左右^ニ曰。夫人魚者。瑞祥物也。今無^シ飛兔^ヲ。出^ス人魚者。反^テ不^レ祥。汝等識^セ之^ヲ。

數日之後。更還^ス二蜂岡^ニ。復到^リ三山崎^ニ。指^{シテ}北岡下^ヲ。謂^テ左右^ニ曰。此地勿^レ汚^ス。應^ニ建^ス伽藍^ヲ。

乃渡^リ大^ニ河^ヲ。經^テ過^リ交野^ヲ。自^リ茨田堤^ニ。直^ニ到^リ堀江^ニ。宿^シ江南原^ニ。指^{シテ}東原^ヲ。謂^テ左右^ニ曰。爾後一百歲間。有^リ二帝皇^ヲ。興^ス都此地^ニ。而一十餘年後。狐兔成聚^ス。

爾乃赴^リ住吉^ニ。到^リ于^ニ河内^ニ。駐^リ玉^ヲ茨田寺東側^ニ。密謂^テ左右^ニ曰。吾死^ス之後。二十年之後。有^リ二比丘^ヲ。知行兼備^シ。流通三論^ヲ。救^ニ濟^ス衆生^ヲ。爲^レ衆所^レ重^シ。是比丘非^レ他^ニ。是吾後身之一體也^{ナリ}。

北方望^テ大縣山西麓^ヲ。謂^テ左右^ニ曰。一百年後。有^リ二愚僧^ヲ。建^シ立^ス精舍^ヲ。造^レ像高大^ニ。縫^テ一萬袈裟^ヲ。施^ス諸比丘^ニ。

已而召^リ二科長墓工^ヲ。令^ク曰。吾以^ニ已歲^ニ。必到^リ彼地^ニ。汝宜^ニ速造^ス墓工^ヲ。師連啓曰。墓既成矣。未^ダ開^カ隧道^ヲ。太子曰。勿^レ開^ク隧道^ヲ。唯墓內設^ニ二牀^ニ耳^ヲ。

道^ヲ。唯墓內設^ニ二牀^ニ耳^ヲ。

夕時。還斑鳩宮。路過勢益原。北顧謂左右曰。可。恰三十年後。有二信女。建小寺於此地。乃歌曰。

伊能知耶。麻多畿飛屠波。與利胡毛。斯藝俱利耶磨能。久麻雅斯乃波烏。迦宇陪能伽座理邇。佐斯都迦能胡珥爾乃到。于推坂東。望本宮。乃歌曰。

伊伽留雅能。美耶能伊羅迦珥。毛由流比能。保牟羅能那伽珥。胡古路波伊利努。

夏四月。攝津國司獻物。其形如蒲生河物。太子謂左右曰。此不祥之物也。令速捨去。

是月。太子奏。自磐余彥天皇。至於泊瀨部天皇。共三十四代天皇。俱上其諡號。

秋八月。太子齋戒而入夢殿。既出。而釋神代占法。以著三百九十章句。

是月。太子晨朝。天皇謂於太子曰。朕夢三皇太子容儀。艷麗異常。而服錦衣。是何祥耶。太子流淚奏曰。是臣離陛下之祥也。天皇亦泣。涕滂沱。

冬十月。太子奏曰。臣漸罹病。伏願賜貴藥治之。天皇賜藥千餘種。太子乃合藥。以施諸病人。不。服。一丸。

是歲。天皇詔曰。朕。婦女。且頑鈍。辱登大業之位。幸得太子良佐。而天下泰平。國土安穩。然今聞太子不豫。終日憂念。通霄勞慮。唯願留跡於久年。紹隆佛法。住。化。於。長。齡。經。理。天下。而今不能為。朕當。如。之。何。太子所懷何事。若

有所思奏之。朕則遂其所懷。於是。太子上疏。其辭曰。

臣廩戶言。伏蒙天恩。所勞猶痊。此身無常難保。此體有漏易滅。業之所制有限。命之無緒巨延。臣荷天慈。猥以執列。天恩無疆。報謝何及。因先年錄二十七條憲法並天皇國紀等。臣復奉為國家。建立諸精舍。但念住持方便。更無有他樂。仰願興隆三寶。導利蒼生。率土安穩。庶民快樂。因有四種意願。其一曰。奉為天皇并累代天皇。營造七箇寺。法隆學問。四天王。法興。法起。妙安。菩提。定林。是也。邦有神珠。蠱魅莫侵。國興三寶。何禍之有。伏願陛下。覆護伽藍。紹隆三寶。久保國家。其二曰。住法隆學問寺僧侶。每年九旬。當講法華勝鬘維摩三部經。法輪常轉。濟度萬民。紹隆三寶。擁護率土。其三曰。釋迦佛法。以八畜興隆焉。素服受用。法則滅矣。是故佛經曰。一切俗家。不得受用。三寶財物田園。不得驅使。三寶奴婢牛畜。若有受用驅使者。破滅佛法。破滅佛法一故。國家滅亡。伏願臣所建之諸寺。陛下及累世天皇。厚顧相續。堅造房舍。雖為臣子孫兄弟。不可使預伽藍事。恐愚蒙之侶。犯用財貨。破損伽藍。縱使不犯用。而觸事有失。必殖泥犁之因。其四曰。臣於熊凝村。造道場一區。營事未辨。伏願陛下及累代天皇。營造相續。必成二大寺。以護邦家。臣雖不敏。歸依三寶。謹錄遺願。以寄臣田村。

一以聞。臣廩戶言。

二十有八年庚辰。皇太子四十九歲。春正月。太子奏^シ編^ス脩^ス國史^ヲ。乃與^ニ蘇我馬子大臣。秦河勝^ノ大連。中臣御食子大夫等^ノ。相議^シ而編^シ脩^ス天皇紀^ヲ。及國紀臣連伴造國造百八十部。并公民本紀^ヲ。二月。初花之時^ニ。太子召^{シテ}大臣大連及群臣^ヲ。饗^シ應^シ於^ニ斑鳩宮^ニ。三日三夜。各有^ニ恩賜^ス。三月上巳。太子奏^{シテ}召^{シテ}大臣大連及群臣^ヲ。賜^フ曲水之宴^ヲ。時命^ニ諸蕃大德^ヲ。并漢百濟好文士^ヲ。賦^{セシム}詩^ヲ。恩賜^リ有^レ差。秋九月。太子設^ク大宴^ヲ。天皇臨^{ミテ}而御^{シテ}之^ニ。群臣各上^ル和歌^ヲ。冬十二月。天有^ニ赤氣^シ。長一尺餘形如^シ雞尾^ノ。百濟僧觀勤奏^{シテ}曰^ク。是蚩尤旗^シ。兵之象也。恐太子遷化之後^ニ。二十二年。或有^ハ三兵滅^ス其家^ヲ乎。太子領^ス之^ヲ。二十有九年辛巳。皇太子五十歲。春二月二十二日。薨^{シテ}於^ニ斑鳩宮^ニ。先是。太子謂^テ於^ニ膳^ハ大娘^ハ曰^ク。吾今夕遷化^ス。汝亦可^ニ共去^ル。於是俱沐浴^シ。服^シ新潔衣裳^ヲ。而入^リ閨房^ニ。明旦久而不起^ス。左右開^キ殿戶^ヲ。乃知^リ薨去^リ。天皇聞^ク之^ヲ。車駕臨^{シテ}御^シ。大哭而慟^ス。是時。諸王諸臣。及天下百姓。悉皆悲哀。老者如^シ失^フ愛子^ヲ。而鹽酢之味^ヲ。在^ニ口^ニ不^レ嘗^ム。幼者如^シ喪^フ慈親^ヲ。而哭泣之聲。滿^ツ於^ニ道路^ニ。農夫輟^メ耕^ヲ。機女不^レ織^ス。皆言^フ。日月失^ヒ輝^ヲ。天地既崩^ル。自^リ今以後^ニ。何^ノ所^ニ侍^ツ怙^ス。已而造^リ雙棺^ヲ置^キ大輿^ニ。葬^ル科長墓^ニ。直置^ニ墓內^ニ。閉^メ南隧門^ヲ。葬送之儀。同^ジ於^ニ乘輿^ニ。陪從之人。各擎^グ雜花^ヲ。釋衆讚唄^ヲ。自^リ斑鳩宮^ニ。到^リ於^ニ墓處^ニ。道之左右。百姓如^シ牆^ノ。各擎^グ香花^ヲ。或^ハ佛歌連

韻^ス。不^レ待^テ官告^ヲ。皆著^ニ素服^ヲ。天皇勅^{シテ}大臣^ヲ。置^ク守墓十戶^ヲ。葬送之後。諸國百姓。遠來廻^リ墓^ヲ。相聚^ヒ叫哭^ス。日夕弗^レ絕^ス。五十日後。漸有^ニ減耗^ス。有^ニ異鳥^シ。形如^シ鵲^ノ。其色白^シ。常棲^ニ墓上^ニ。鳥鳶到^リ。即遠追去^ス。時人名^ヲ爲^ニ守墓鳥^ニ。三年之後。無^レ復來^リ焉。太子薨^ズ日。甲斐驪馬^ノ。悲鳴^{シテ}不^レ喫^ム水草^ヲ。隨^テ輿到^リ墓^ニ。閉^ル隧之後。見^テ墓大鳴^キ。一躍而斃^ル。乃埋^ム其尸於^ニ中宮寺南墓^ニ。是年。三韓王。聞^キ太子薨^ズ。乃大悲歎^{シテ}。著^テ服爲^レ喪^ヲ。三韓人民。亦大悲哀^ス。

（題簽）舊事紀訓解 憲法 （第八十七册）

先代舊事本紀訓解卷之八十七

平安 松菴 三重貞亮著

一曰^ニ。以^テ和^ハ爲^シ貴^シ。無^レ作^ル爲^ス宗^ヲ。人皆有^ニ黨^ヲ。而少^シ達^ス者。是以或不^レ順^ニ君父^ヲ。亦違^レ於^ニ鄰里^ニ。然上和下睦^ス。諧^レ於^ニ論^ニ事^ヲ。則事^ニ理^ニ自通^ス。何事不^レ成矣。二曰^ニ。承^テ詔必謹^ム。君則天也^{ナリ}。臣則地也^{ナリ}。天覆地載^ス。四時順行^ス。萬物得^レ通^ス。地欲^ニ覆^ニ天^ヲ。則致^ス壞^ル耳。是以君言^ハ臣承^ケ上行^ハ下效^ス。故承^テ詔必謹^ム。不^レ謹自敗^ス。三曰^ニ。群卿百寮。以^レ禮爲^シ本^ト。夫治^ル民之本^ハ。要^ニ在^ニ於^ニ禮^ニ。上無^レ禮下不^レ齊^ス。下無^レ禮必有^ニ罪^ニ。是以君臣有^ニ禮^ニ。位次不^レ亂^ス。百姓有^ニ禮^ニ。國家自治^ス。四曰^ニ。絕^テ讎棄^レ讎^ヲ。明^ニ辨^ニ訴訟^ヲ。夫百姓之訟。一日千事。一日

尙然。況累年乎。今治訟者。得利爲常。見賄聽讞。會饗忘
 僻。故有財之訟。如石投水。乏者之訴。似水投石。是以
 窮民。則不知所由。臣道亦於焉闕矣。

五日。懲惡勸善。古之良典。是以無匿二人善。見惡必匡。夫
 詔詐者。爲下覆國家之利器。爲下絕人民之鋒劍。佞媚者。對
 上則好說。下則逢迎。下則誹謗。上失。如此之人。無忠於君。
 無仁於民。是大亂之本也。

六日。入各有任。掌不令相濫焉。夫賢哲任官。頌音則起。
 姦佞任官。禍亂則繁。世少生知。克念作聖。事無大小。得
 人必治。時無緩急。遇賢自寬。由是國家永久。社稷無危。故
 古聖王。爲官以求人。不爲人求官。

七日。群卿百寮。早朝晏退。王事靡盬。終日難盡。是以遲
 朝。不逮于急。早退。必事不盡。

八日。信是行之本。當每事有信。夫善惡成敗。要在於信。
 君臣俱信。何事不成。君臣無信。萬事悉敗。

九日。絕忿棄瞋。不怒人違。人皆有心。心各有執。彼是
 則我非。我是則彼非。我非必賢。彼非必愚。共是凡夫

耳。是非之理。詎能可定。相俱賢愚。如環無端。是以彼
 人雖瞋。還恐我失。我雖獨得。從衆同舉。

十日。明察功過。賞罰必當。昔者有功必賞。有罪糾罰。今
 者賞不在功。罰不在罪。執事群卿。宜明賞罰。

十一日。國司國造。勿飲百姓。國靡二君。民無二主。一
 率土兆民。以王爲主。所任官司。皆是王臣。何敢與公。賦

二歛百姓

十二日。諸司任官者。當共知職掌。或病或使。有闕於事。
 然得得知。之日。相和如素。知不以下非與聞。而廢公務。

十三日。群臣百寮。無有二嫉妬。我既嫉人。人亦妬我。嫉妬之
 患。不知其極。所以智勝於己。己則不悅。才優於己。己則嫉妬。
 是以無出良哲。五百歲之後。縱令遇賢。千載難以得一聖。
 其不得賢聖。何以治國乎。

十四日。背私向公。是臣之道。凡人有私。必有謀。有謀則失
 誠。失誠則以私妨公。違制犯法。故古典云。夫子之道。忠
 恕而已矣。其斯之謂歟。

十五日。使民以時。古之良典。故冬月有間。可以使民。
 從春至秋。農桑之節。不可使民。不農何食。不桑何
 服。

十六日。夫事不可獨斷。必須與衆論。小事是輕。不可必
 衆。唯速論。大事。恐或有失。故與衆相辦。則得其理。

十七日。篤敬三法。三法者。神儒佛也。是百姓之總歸。萬國之
 極宗。何世何人。弗貴是法。人鮮尤惡。善教從之。不
 敬三法。何以直枉。

向日社從五位雅樂頭六人部節克傳之

〈謝 辞〉

以上聖徳太子伝の本稿への収録に当つては明治聖徳太子記念学会事務局より懇切にして丁寧なる解説書と収録の御許可を頂くことが出来た。ここに特筆して御礼申し上げる。

(二〇〇七年五月八日受付)